クップルングの盗賊

楠木あいら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クップルングの盗賊

【Ｎコード】

Ｎ８６１０Ｖ

【作者名】

楠木あいら

【あらすじ】

情報の町から修行のために出てきた助針（じょしん）は盗賊団のレポートを書くため港町に来たが事件に巻き込まれていく…

『黒雪の婚約者』で出てきた盗賊団の、ちょっと前の物語ですが、単独でも読めます。

ホームページに載せたのを修正しました。

情報の町から来た男

「その話、本当？」
日当たりのよいテラスで昼食をとる弟は食事を中断してまで、長男に顔を向けた。
「俺が嘘つくわけないだろう。
うちの　かわいい末っ子は、親父殿の命令で、海上に出て船に乗り修行の旅に出たわけよ。
『トンバラズ』とかいう港町に行って『クップルング』についてのレポートを提出しろってね」
「レポートねぇ、学生じゃないんだから…」
「でも、温室育ちの世間知らずには、いい内容だよ」
「…クップルングねぇ」
手に持っていた食物を平らげてから、次男は気持ちの良い風を浴び、キレイな青空を見上げた。
「まさかとは思うが、次男君。クップルングが何か、知らないわけはないだろうな」
「知らなかったら、情報屋がつとまらないよ。ましてや、この世界にある全ての情報を握る上集家の息子ともなれば、ね」
「まあ、レポートとしては、いい場所を選んだけど…大丈夫かな？」
「ま、直接、聞かない限り問題はないよ」
「そうだな、いくら、うちの助針でもなぁ」

しかし…助針は道を尋ねるように、それを聞いてしまった。
「どうしてだ？裏道でぼーっとしている人に聞いたら…。何で追いかけられなければならないんだ？しかも、大男に」
でも、何とか…いや運良く逃げ切ることができた。
「何なんだ、一体」

ぼやく助針は、とりあえず大きな通りに出て安心することにした。
トンバラズと呼ばれる港町は、助針が住み慣れていた町とかなり違い薄汚れた色の建物が多く、歩くごとに不安がまとわり付いてきた。
とはいえ、世間を知らずに育っていなければ、よくある港町の風景である。
磯を含んだ風が吹き、大小の船が海を占領する町には、海の世界の往復に慣れて耐えてきた様々な人種が町を歩き、船荷を集め保管する倉庫が建ち並ぶ。
逃げることに専念していた助針は、その倉庫エリアを歩いていた。
「表通りならば、人がいっぱいいることだし」
角を二つ、三つ曲がると、ようやく人の姿が見られるようになった。
「すいませーん。大通り下りには、どう行けば…」
声に気づいた少女は笑みを浮かべた。
にこっ　ではなく、にやっ　と…
「……」
羽交い締めにされて、暗転に陥ったことに気づいたのは、その後だった。

「で、何なわけ？白昼堂々　うちらのことを聞いてきた奴は」
場所は変わって『クップルング』と名乗る者たちの集まり場。
５人の男女が丸いテーブルを囲み、手にしているトランプを見つめていた。
「世間知らずの平和ボケ男って事は…。仕事を持ってきた、お客さんか？」
「いえ。奴が話すには、一人前の『情報屋』になるため、修行としてうちらのレポートをとってこいと。親御さんに言われたそうです」
「何それ」
そこに居合わせる唯一の女性が大げさな声でいったが、話なのか、

手に取ったカードのせいなのかは、わからなかった。
「何でも『情報の町』っていう所から、来たそうですよ」
「じょーほうの町？聞いた事あるか？」
５人の中で年長にあたる中年男は問うついでに、仲間の顔色を伺った。
「…何だ全滅か」
「そういう黒粘土（くろねんど）は知ってるわけ？」
『黒粘土』と人の名前のように使っているのだが、彼らにとって仲間しか通じない固有名詞であり、本名は別にある。
「知らない。
しかし…作った話にしては、怪しすぎるな。　嘘をつくんだったら、もっと　まともなものになるんじゃないのか」
「じゃあ黒粘土さんは、本当の話だと思うんですか？」
敬語を使う大男は、助針を追い、羽交い締めにした者であった。
「本当にしては、かなり浮いている気もするが…案外、本当だったりしてな」
「そうかあ？もし、本当だとしたら…なぜ、クップルングなんだ？」
５人の中で一番小さ過ぎる男は、自分のカードだけを睨みつけながら聞いたが、返答はなかった。
しばらくカードのやりとりだけが続いたが、ややあって、口を開いたのは年長の黒粘土であった。
「もし、変な奴の話が、本当だとしたら…その『情報の町』とやらは、かなりの所だろうな」
「どうして？」
「港町にいる小さな盗賊団の事を知り尽くしているからだよ。
レポートを書かせるほど、興味深い所だとな」
「なるほど…俺も同感だな」
しかし、反発の声が一斉にあがった。
小さな男の言葉にではなく、カードを机に置いた行動に…
「あー、汚ねぇぞ、丸虫（まるむし）」

「そうですよ。俺なんか、あと一枚だったのに」
「過ぎたことは、仕方ない。さて…」
「さてって、何よ。勝ち逃げする気？」
「仕事だよ。
…の前に、その怪しい、謎の人物はどこにいるんだ？」
「奥の部屋よ。私も行く。そのお兄さん、かなりの美男子なんでしょ。
丸虫、ついでだから連れていってあげる」
立ちあがった女性は、丸虫と呼ばれる男をひょいと持ち上げた。
薄暗い部屋では、縄でぐるぐる巻きにされた平和ボケ青年が、見張り達から真実を聞かされていた。
「え、盗賊…」
「そうだよ。『クップルング』というのは、この港町をしきる我が盗賊団の名前さ」
「え…じゃあ父上は、私に盗賊のレポートを書けと…」
「そういうこったな。お前さんの話が本当ならば」
「本当だってば。何度も言うように、私は…」
短い悲鳴が目の前で聞こえた。
今の今まで助針をからかっていた見張りの一人がのどを押さえ、それから派手に倒れた。
「わああ。ファーロだ。ファーロが攻めてきたっ」
残りの一人が叫び声をあげだが、侵入者の一人によって倒されてしまった。
…丸虫と女性が扉をあけたのは、この直後であった。
「丸虫、2人を呼んで」
しかし、その直後に後方からも、派手な音が響いてきた。
「挟み撃ちだ。ファーロの奴ら、表と裏口から入って来やがった」
「……」
呆然とする助針の前で、戦闘は繰り広げられていた。

女性は細身の剣を振りまわし、少し離れた所から、丸虫と思われる、別の戦闘音や声が絶えることなく聞こえた。
「まったく、丸虫と一緒にくるんじゃなかった」
「それは、こっちのセリフだ」
盗賊たちに余裕があるのか、無駄口を叩いていたが、それも一時的だったらしい。
それから先、会話というものが一切聞こえなくなったから。
「…。に、逃げなきゃ」
身の危険を感じた助針は、腰がひけているものの、脱出をはかることにした。
幸いにも…というのか、侵入者が来る前から床に転がされているので、戦闘者たちの目に入ることなく、助針は、取り上げられた武器（…護身用の小さなナイフ）を数メートル先にある棚から取り出し、口で縄を切り落とした。
戦闘に背を向けて作業をする無防備な助針にとって、恐怖心がとりつき、カタカタ震える体で切るのには、かなりの時間と勇気を必要とした。
それでも無事に何とか切り落として、何とか裏口に向かうことができた。
しかし、助針は裏口の先にも、敵が待ちうけている事なんて知らなかった…。

港町と盗賊

「聞いた？盗賊たちの争いだってよ」
「やだやだ。物騒たらありゃしない」
翌朝、食堂に来た助針は、町人ＡとＢの会話をぼんやりと聞いていた。
「現場には、パッタバッタと盗賊たちが倒れているんだってよ」
「俺、聞いたことがあるぜ。
今はクップルングだけが居座ってたらしいけど、新しい盗賊がこの町に入り込んで来たんだってさ」
「盗賊どもの領土争いか？日の光を浴びて生活する俺たちにとっては、関係のないことだけどな」
飲んでいたスープをテーブルに置いて、助針はパンを食べながら話の続きを聞くことにした。
…はずだった。
「ない…」
パンは…いつの間にか移動していた。
正面に座っていた少女の口へ
「あの～それは私の…」
しかし、パンを食べる少女に返答はなく、他の食べ物まで手を出し始めた。
「あの～。私の朝ご飯なんだけど…」
「追加注文すれば、いいのじゃない」
非常識な行動と言葉に、いくら温室育ちの助針でも文句が言いたくなるのではあるが…顔見知りの少女である以上、そうはいかなった。
安全でかわいい外見にだまされて、捕まるはめなった、昨日の娘。
華奢な体格に、まだあどけない顔は、どこにでもいる町娘に思え

た。
　しかし、ぱっちりとした大きな目から感じる力は、それ以上の年齢と威力を持っていた。
「あの～」
　助針の声にようやく口を開いてくれたのは…デザートまで平らげてからである。
「さてと、お兄さん。昨日の事について説明してくれない？」
　返答ではなく、質問を…
「昨日のこと…ですか」
　しかし、助針は反論することなく、少女は助針の質問に答えてくれた。
「ファーロの連中が来た後の事よ。　現場には、見張りの変わり果てた姿があったけども、残りの連中らしき姿はないの。　お兄さん、あの現場にいたんだから、何か知っているはずでしょ」
「助針と言います。　私は、どさくさにまぎれて逃げてきただけです。
　…でも、私が逃げているとき、丸虫さんという方と女性か敵と戦っていましたが」
「丸虫と赤粘土ね…」
　少女は長いこと考えに沈んでいたが
『よし』と、テーブルを叩いて、立ちあがった。
「あのー。一体、何なんですか？　私を捕まえたと思いきや、人の食事を横取りして」
　不満を口にする助針は、首に何かの感触を感じたものの、目で確認することはできなかった。
「あんたを捕らえたのは、行動に問題を感じたから。さあ、さっさと行くわよ」
　少女は紐を引っ張る仕草をしてみると…
　くん　と、助針は見えない糸に引っ張られ、助針は前のめりにな

ってしまった。
「黒雪印（ブラックスノー）の丈夫で極細の糸よ。
忘れているようだけど、助針坊や、あんたは立派なとらわれ人だからね。
我々、クップルングの」
こうして助針は、自由を失い、安全平和な店から出るはめとなった。
…もちろん、食事代を払ってから…

「はあ…」
抗争中の盗賊に捕らえられた助針は、先行き不安のため息をつくことしかできなかった。
「果たして、無事に町へ帰ることができるのかな？
いや…明日、元気でいられるのだろうか」
とかなんとか、思っていた助針は人の声に気づくことはなかった。
ようやく気づいた時は…
その者が助針の胸倉をつかみあげ、近くの壁へぶつけた瞬間であった。
「がぁっ」
「一言も漏らさずに吐け。兄さんはどこにいる？」
目の前に現れた青年は、殺意に近い視線を助針に向けていた。
「やめなさい。本当に知らない平和人なんだから」
静かな少女の一声は、青年を落ち着かせ、助針から離れさせた。
「…。そうか、なら、悪かったな。脅したりして」
「悪いわね、助針。昨日の留守組に、こいつの兄弟が入っていたのよ」
「…親族の方が、いらっしゃったのですか。気が焦るのも無理はありません。気にしないでください」
育ちのいい助針は紳士的に対応した。
もともと優しそうな顔をしているので、かなりの好感を得たこと

だろう。
「で、誰かから連絡とれた？」
…しかし、少女にとって威力はなく、糸に引っ張られ助針は進むしかなかった。
5、6歩進んだ時の事
「ん？」
助針は　ひゅるるるる　という嫌な音を聞いた。
…そして頭に直撃。
「いたたたたっ」
捕らえ人の騒動に気づいた2人は振りかえり、助針…ではなく、助針にぶつかった方へ駆けつけたのであった…
「ちょっと…」
「丸虫っ」
それも　そのはず。ぶつかってきたのは小さな仲間だったのだから。
「…これが、丸虫さん？」
助針がおどろくのも無理はなかった。　丸虫の体調は１０センチにも満たされず、一見人形のような男だったのだから。しかも、その背中には透き通った、まるで妖精のような羽が存在しているのだ。
さらに…
「兄さん、しっかり」
…それだけではなかったようだ。
長身の助針とさほど変わらない青年は、丸虫を持ち上げ、そう言ったのだから。
「え…兄弟って」
「そうよ。丸虫と細虫（ほそむし）はれっきとした兄弟よ」
「……」
助針はぽかんと口をあけていることしかできなかったが、
他の者たちは、話を進めた。
「俺は大丈夫だ…それよりも、赤粘土が…」

「……」
返答することなく、少女は走りだし、紐を付けられている助針も走るはめとなった。

赤粘土と呼ばれる女性がいる現場は、戦闘場になっていた。
それを目にした少女は、とまどう事なく（…糸を放してから）戦闘の輪へ飛びこんだ。
「細虫、俺の事はいい、後に続け」
「はいっ」
細虫と呼ばれる青年も、短剣を抜き放つと、戦闘の中に入っていった。
戦闘の場は、武器を手にした数十人と一人の女性の不利な戦いだったが、二人が加わったことにより、状態が変わり、不利という言葉が消えうせた。
「……」
赤粘土の前に現れた少女は…まるで、彼女だけ早送りをしているように、あまりにも素早い動きだった。
少女の速過ぎる攻撃に、1人、2人と倒れ…4人目で、敵側が後退を始めた。
「帰って、ボスに伝えな。
クップルングのボス猫は、3年たっても、恨みは忘れないとな」
その姿から想像できない気迫に、敵は　たじろづき、敗走を始めた。
「……」
安全な所で見守っていた助針の肩に丸虫がひらりと止まり。それから説明してくれた。
「あれが。我が、クップルング団の頭、紫羅(しら)だ」
助針は驚いたが、うなづいてしまった。
『クップルングの猫』は、人を威圧させる強大な力を放っているのだから。

「レポートには、最適だと思うよ、ここは」
丸虫はそう言ったが、こうも言った。
『俺にとっては、あんたの方が、興味のある人材だと思うけどな』
と、

港町の攻防戦

一人前の情報屋となるため、世界各地をレポートすることになり、私、助針（じょしん）は指定された港町に行き、盗賊団を観察することとなったんですが…どうも争いに巻き込まれてしまいました…。

『クップルング団』の女頭、紫羅（しら）さんは、行方不明になっていた赤粘土さんを敵の盗賊から救いだしたものの、赤粘土さんは傷を負い手当を必要としていました。

「ったくもうファーロ（敵の盗賊団）の奴。玉の肌に傷つけるなんて信じらんない」

紫羅さんは、赤粘土さんの傷を見て言っているけども、私は、かわいらしい少女の外見を持つ紫羅さんが、ここのボスなのが信じられません…。

赤粘土さん（女性）の傷は、腕と脚（胴体に近い方）なので、シーツをカーテン代りにして、男たちの目から見えないようにしています。

「あの～。よろしければ、家からもらってきたぬり薬がありますけど、どうですか？」

「じゃあ、ちょうだい」

布ごしから手が現れたので、助針は自分のバックから取り出しそれを渡した。

「頭…」

同室にいた青年、細虫から助針を信用して良いのかという不満があがったものの、紫羅はさらりと、不満を製した。

「大丈夫よ。助針から証明できるものをもらったんだからね。薬に変な物が入ってるわけないでしょ」

「身元を証明するものって何なのですか？」

「ここにいる『平和ボケの青年は、これでも情報の町の町長、上集（うえしゅう）の息子です』っていう手紙。上集さんっていう人のサイン付きで」

「かしら～。そのどこが信用できるんっていうんですか。そもそも情報の町すら存在するのか、怪しいって言うのに」
「細虫。安心しさなさい。女頭の勘は、結構当るから」
「…結局。そっちにたよった上の決定、なんですね」
細虫の言葉は、どこかトゲがあって、助針は苦笑するしかなかった。
「細虫さん…。この部屋に入った以上、信用してくださったと思ってたのに」
と、助針がつぶやくのも無理はない。ここは助針が借りた宿の部屋なのだから」。
「ええ。信じなければ、あなたを入れませんよ。俺は、ただ頭の真意を確かめたかっただけです」
『信用なさっているのに、どうして冷たいんでしょう』と、助針は悲しく思うものの、細虫の真意は、わからなかった。
「頭、連絡がとれたよ」
人形のような小さな体と、透明な羽根を持つ青年…しかも人間サイズの細虫の兄でもある丸虫は、窓から姿を表わした。
華奢な体格に赤い服と短い髪をした黒目の青年。その名前の由来は、想像できるだろう。
「丸虫でも、こっちに来たら、ただじゃ済まさないからね」
「わかっているよ。じゃあ、ここで報告するよ。
襲撃にあった留守組以外、皆、アジトの近くで待機状態になっている。頭、あとは、あんたの命令次第だ」
「わかった。奴らに気づかれることなく見張るように、連絡して、ただし」
カーテンから出てきた紫羅は、飛んでいる丸虫に近づくと。その小さな肩を軽くつかんだ。
「く…」
短い呻き声があかがる中、歩き出した女頭は、後ろを振り返って命令した。

「連絡は『影』がすること。丸虫は、細虫の監視付きで、その肩の傷を治してからよ」
「相変わらず、目のいいことで」
顔を歪ませながら言う丸虫に紫羅は、にやっと笑った。
「じゃあ、助針行くわよ」
「へ？私？」
反論を唱えようとした助針よりも早く口を開いたのは、細虫だった。
「頭。助針は団の人間じゃないんですよ。それに…」
「ここにいる以上、使うのは当然よ。それに、気になることがあるし」
紫羅は黒いローブを着ながら、細虫の口を閉ざさせた。
「まあ、頭の意見には賛成だな」
「兄さんまで…」
「気にならないのか、細虫。
なぜ…あの襲撃が起きたとき、敵のまっただ中にいた助針が、今、こうして元気にしていられるのか」
「それは…」
「単なる偶然ですよ」
「記憶のない人間に言われても、納得できないわよ。とにかく細虫、副ボス（丸虫）も賛成しているの。異論はないわね」
「…はい」

「私も細虫さんの意見に、賛成だったのですが」
闇に包まれた町中を歩く助針は、横にいる紫羅に言った。
「君の場合は、自分の身が危険になるからでしょ」
長身の助針を見上げるものの、盗賊団の女ボスは深くかぶっているフードのせいで表情はわからなかったけど、どういう顔で言っているのか想像できた。
「当然です」

助針はさらに、反論を唱えようとしたが、紫羅は別の話を出した。
「副ボスが丸虫だなんて、想像つかなかったでしょう」
「外見からすれば、ですが…」
『紫羅さんが頭である以上…』と心の中で付け加えた。
「丸虫とは、同じ館から手を取り合って脱走してきた仲なのよ。クップルングも私と丸虫で作ったしね」
「へえ、そうなんですか」
助針は相槌をうったものの、紫羅の話はそこで終わってしまった。
「しら…さん？」
「え。なに？」
フードのせいで見ることはできないけども、何か考えていたようだ。
「あぁ。そうね、ありがとう」
「私は、何も言っていませんけど」
「あら、警戒の言葉をかけてくれたんじゃなかったの」
語尾を高めて、第三者に聞こえるように言い放っていた。
紫羅は辺りを見回し、緊張の空気が張りつめていることを感じ取った。
それを表わすかのように2人、3人と…計5人の男たちが、2人の前方を塞ぐ。
「いい機会ね」
「？何かです」
「君の力よ。というけで頼んだわよ」
フードの中で笑みを浮かべた紫羅は、どんと助針の背中を押して、男たちの前にたたせた。
「え…ちょっとって、…さ…わっ」
反論しようと紫羅に振り返ろうとしたときにはもう、戦闘は始まっていた。
助針は顔に向かってきた刃を慌てて避けたものの、敵の攻撃は休

むことはなく、大きく振り上げた。
「ちょーっと、助針。そいつ、一番下っ端よ。なのにどうして、てこずるのよ」
高みの見物と決め込んでいる紫羅は、呑気に言ったが、腕を組み苛立ちと不満を表わしていた。
「当たり前…です。私は」
相手の攻撃をかわし、途切れながら言おうとしたものの、できなくなってしまった。
たまたま落ちていたゴミの塊につまづき、見事に転んでしまったのだから。
相手もそのチャンスを見逃すことはなかった。刃こぼれのある安い長剣をうつ伏せに倒れている助針の背中へ、突き刺した。
「……？」
助針は、背中に嫌な感触を微かに感じ取ったものの、痛みのないことに気づき、おそるおそる見上げると…
自分を刺した男は、攻撃を加えた瞬間のまま、時が止まっていた。
その体は動くことはなく。
「まったく」
男の後ろにいた紫羅は、男を蹴り、地面に倒れさせた。
どさっと音が聞こえた以外に音はなく、5人現れて始まったはずの戦闘は終了していた。
「服以外何ともないよね。坊ちゃまだから、新しい服を新調するんでしょうね」
「ええ、まあ…」
「じゃあ、恩人の分も頼むのが当然よね」
「え…ええ。まあ、ところで紫羅さん。一体、何があったんですか」
何事もなかったかのように、スタスタと歩き出す紫羅の後を追い、助針は倒れている男を通り過ぎた。
「君がのんびり逃げている間に、片づけちゃったわよ。といっても私と影で1人ずつね。残りの3人は逃がしちゃったけど」

「影さんって？」
裏路地に入り込んだ助針は、首筋に冷たいものを感じた。
「動くと、切れる」
「彼が影よ」
人の気配を察知できない助針でも背後に人がいる事を、はっきりと感じ取ることができた。
「助針。この間はどうも」
「この間って？」
「君が捕まる理由になった瞬間よ。道を訪ねるふりして、影の肩に触ったじゃない」
「あれは、ふりじゃなくて、本当に訪ねたんです」
「堂々と裏集団の事を？ましてや、見られず、触らせずをモットーにする影を？」
紫羅は一度口を閉じてから、影について語り始めた。
「影は、その名の通り、人前に姿を見せないのよ。仲間でも、彼の姿を目にした子はいないわ」
「え、そんなにすごい方何ですか」
「なのに君は、影の姿を見つけ、彼に触れた」
紫羅はくるりと振り返り、助針を身上げた。
フードに隠れて分からないが、その気配は獲物を見つけ、見続ける猫と変わらない気がした。
「でも、それは、偶然ですよ」
「偶然ねぇ…」
「……」
無言の影は明らかに納得できない様子だったが、場合が場合なので、それ以上追求することなく、助針から武器を離した。
「さて、助針。この先、何もない広い場所に出るわ。一気につっ走るわよ。私の後についてらっしゃい」
助針が問い返す暇もなく、紫羅の軽やかな足が起動した。
「ま、待ってください」

助針も慌てて駆け出し、裏路地から広い所に出た。
「ふえ…ここは…」
とまどうものの助針は、引き離されていく紫羅に追いつこうと必死で足を動かした。
助針の視界には、だだっ広い広場、船着き場ががあり、それから大きめの船が一艘、あった。
しかし、それ以外は何もなかった。
船に出し入れする荷物すら。
「ようこそ。ファーロのアジトへってことね」
走りながら紫羅は言葉を放ち、先の警戒を助針に教えた。
「え、でも紫羅さんの子分さん達が周りにいるんじゃなかったんですか？」
「…。いたはずなんたんけどね。影、見てきてくれない？丸虫が言ってたのと状況が違うわ」
影からの返事はなかった。
不安に助針に紫羅は『身を隠すところがないから、見えないだけよ。影はどこかにいて、ちゃんと聞こえているから』と、さらりと言った。
2人は、広い船着き場を駆け終わり、陸と船を繋ぐ橋、厚い板を軽やかに通り抜ける…もちろん、それは紫羅だけで、助針は、おっかなびっくり。さらに敵がどこからやってくるのか、気が気でなく、腰がひけていた。
「頭、気をつけてくれ」
船にたどり着いた紫羅に男の声が聞こえた。
「紫羅さん、何かいますっ」
板をたどたどしく進んでいた助針も、紫羅に襲いかかろうとする人の気配に気づき声をわあけだが：
紫羅は、それよりも早く、腕と脚を動かし、敵2人を倒していた。
「2人とも、声かけるのが遅すぎるわ。それよりも、無事で何よりだわよ黒粘土」

倒した敵に片足を乗せて、パンパンと手を叩きて典型的なポーズを決めてから、男の方に向かった。
黒粘土。留守組でカードゲームをやっていた年長の男だった。
「残念ながら、俺、1人しかない」
ようやく板を渡り終えた助針は、明かりがほとんどない甲板を進み何とか、足を止めることができた。
「俺は、見せしめというか、頭に伝言するため、ここのマストに縛られている」
闇中の戦闘を難無くこなした紫羅は、黒粘土と呼ばれる男を見下ろし、子分の状態を調べた。
「船内にいるのは、間違いないわね」
「ああ。頭。奴からの伝言聞くか？胸くそ悪いが」
「聞いて上げるよ」
「トンバラズを我がファーロに渡せ。小猫は、大人しく家で丸くなってな」
「ふん。私が小猫だったら、そっちは猫に住み着こうとする蚤じゃないのよ。黒粘土、その傷じゃあ蚤退治は無理ね。丸虫たちと合流して。1人で歩ける？」
「ああ。でも、頭。その数で大丈夫なのか」
助針は目が向けられたのを確信することができた。
「あとから、影が来るわ。それより、私が来るとき、丸虫か、他の子の接触が、それらしい気配はなかった？どこかで、待機しているらしいんだけど」
「さあ？俺は船内からここに出されただけだし。ここは見ての通り、回りに何もないからな」
「そうね」
脇腹を押さえ立ち上がる黒粘土を見つめ、不安になりながらも見送った。
「さて、助針」
紫羅は黒ローブのフードを取り、助針を見上げた。

「残念ながら、この先は危険だから、どうなるかわからないわ。だから、助針の身に何が起きても助けられないくなる。それが嫌なら、情報の町に戻ってちょうだい」
「……」
私は…
紫羅さんの言葉に、うなづいて黒粘土さんの後を追おうかと思いました。
でも、この人を1人には、できなかった。
正確には影さんがいますが…小猫のように愛らしい姿をしているからかもしれないし。それなのにも、1人で立ち向かおうとする紫羅さんの姿に一人逃げ出す事が恥ずかしく思えたからもあるけど…この人をほったらかす事はできなかった。
でも、私の貧弱な力では守るどころか足を引っ張ってしまう…
「…着いていきます」
でも、本気で立ち向かえれば…何とかなるかもしれない。
それは甘い考えかもしれないけれども。私は同行することにしました。
「じゃあ。ついてらっしゃい」

船中の戦い

船着き場や甲板と違い、船の中は騒然としていた。
紫羅が一歩足を踏み入れた途端、進入をつげる声が響き、次にうめき声があがった。
女ボスの武器は猫の名にふさわしく、鋭い爪がついた手袋で引っ掻き、肌色の球石に丈夫な糸をつけた
遠距離用の武器、猫じゃらしを振り回した。
『戦意を失わせるマジックアイテムよ。便利だけど触ったら、私も戦意維無くしちゃうから、扱いが大変なのよ
。もちろん手袋なしじゃ使えないから、面倒くさいけど』
爪に猫じゃらし…まさに『猫セット』と思う助針であった。
その助針は戦意を失い、座り込む人を無傷で通り過ぎることができた。
「しかし…ずごいですねぇ、紫羅さん」
「こんな狭い船内、よく動き回れるってこと？」
「それもありますが、こんな薄暗いのによく敵を見つけて、敵の動きを見極めて、攻撃でかることです」
ちなみに、いま2人のいる船内には明かりというものはあるが、電気のない世界では、薄暗く少しでも明か
りから離れれば暗闇に入ってしまう。
「特殊能力よ。闇の中でも見られる目があるからね」
「…耳としっぽがあれば、完璧ですね」
猫という単語を持ち合わせている紫羅であるが、その姿に耳と尻尾は見当たらない。
「目は光らないわよ。さて…」

紫羅は扉を開けた。
「どうも、気なるのよね」
扉の先は、何かが所狭しにおかれてある倉庫らしい所であったが、紫羅は出ることなく、助針に扉を閉めさ
せた。
「丸虫は、確かに子分たちを待機してあるっていったのに、誰1人いない」
現代のように天井に取り付けられた弱々しい明かりの下、動き回りながら不安を口にした。
「でも紫羅さん。アジトは船で、周りには何一つないんですよ。どこかに隠れてたんじゃないですか」
「あら、頭である私に何も言わず？
町の中を裏路地を通ったのに子分らしい姿、気配すらなかった。影でさえ見つけだすことができず、様子を
見に行かせたのよ」
「それは…」
助針は返答に困り、闇に近い空間で紫羅の姿すら見失ってしまった。
「…これは、女のと頭の勘にすぎないんだけどね…」
「裏切り者…がいるって事ですか？」
率直な言葉を口にした助針は、目を光らせる鋭い視線を感じた…と言っても、実際に光ることなく、助針の
幻ににすぎなかったが。
「まあね。でも外れてほしいものよ。皆、心から信頼している仲間だから、だけど…」
右側の壁から物音がした。
「外れることはないよ『女と頭の勘』は」

紫羅に説明を聞くと、壁に隠し扉があって開いており、その先には階段があるという。
闇に近い中、おっかなびっくり階下に着くと。
助針の足の遅さにあきれ顔の紫羅と、昼間のように明るい通路が待っていた。
「さっきいた通路と全然違いますねぇ」
「倍はある明かりに、高そうなじゅうたん。どう見ても、ボスレベルの部屋につながっているわね」
「じゃあ、いよい…」
「頭」
助針の後ろで声がした。
闇の中から現れたのは、背丈が助針と変わらない青年、細虫。
「頭だけで行かせるわけにはいかないよ」
助針を足すことなく…
「細虫。私は丸虫の見張りをしてって、言ったじゃない」
細虫は苦笑した。
「監視人が近くに入れば、それでいいんだろう」
そう言葉を放つ丸虫を懐から取りだし。
「…ったく。いい根性してるんじゃないの丸虫」
「その言葉、そっくり返すよ」
「…」
紫羅はため息をつくと、くるりと背を向けた。
「じゃあ、行くわよ。皆、気合いをいれてね」
扉は難なく開き、紫羅は重要人物を目にすることができた。
「……」
全身を血に染めて。
「…どういう事だ」
呆然とする細虫の声を聞きながら紫羅は、慎重に辺りを見回した。
それから顔を背けることなく、その物体に近づき観察を始めた。
「間違いなく、ここのボスね」

「なんで…また」
「仲間割れか…」
「そんな事より兄さん、あいつは？あいつはどこにいるんだ」
細虫の指している単語は、未だに見つからない仲間の事だろう。
「細虫、捜しに行くぞ」
「はい」
兄弟が慌ただしく駆けていく中、紫羅は、あごに手を当てて物体を見つめた。
「…よく、冷静に見られますね。紫羅さん」
真っ赤な物体から目を逸らしているが、温室育ちの助針の顔は真っ青である。
「こういう稼業をしているからよ。で、助針、どう思う？」
「どうって、何がですか？」
「どうして、この男は、こうなったかよ。船内に入ったとき、たくさんの下っ端を片づけなければならなかったのよ…連中は、この光景を知らない、と見ていいわね」
「知らないうちに、仲間割れが起きて、こうなったんじゃないですか？」
紫羅は、何も答えなかった。近づいてくる足音に警戒するため。
「頭、大変なことになってる…」
聞き覚えのある声に、紫羅は警戒を解いた。
…いや、解いてはならない。
そう紫羅の勘が働いた時にはもう、その者は現れて…彼女は動きを封じられていた。
それは…
私が遠距離武器として使うのと同じものだった。黒雪印の丈夫で光沢があって極めて細い。
でも私のより長く、粘着があって一度触れた者から、離れることのない。やっかいな糸。

さらに重りのついた糸は、私という獲物にあたると、そこから幾重にも回れり、そのつど、両手足の自由が

失っていった。

「私があげた糸で、よくもこんな事ができるわね」

中年の男がにやりと笑っていた。

傷を負い、船から離れていたはずの男が。その服は脇腹を中心に染色しているものの平然としていた。

「黒粘土さん…ケガは？」

「粘土のように姿形を変え、その者になりすます。役者としての能力も兼ね備えている以上、負傷人ぐらい簡

単になりすましたって事よ」

紫羅は、ぱちくりとしている助針に解説した。

「…でも、黒粘土さん。どうして、こんな事をなさったんですか？」

「男が野心を求めるのに、理由なんてないだろう。お前のように敷かれたレールを歩ける奴と違って、道のな

い者のは、血路を作らなければならないのだから」

「裏切りによる血路なんて、必要ないわよ…って、今のあなたに言ったって無駄でしょうが」

配置していたはずの部下たちがいないのも、黒粘土の仕業であろう。頭の新しい命令だと言えば部下たち

や、特殊な存在である影さえも現場から離れさせることができるのだから。

黒粘土はにいっと笑った。

「今回の裏切りもあんたによる、仕業なら、前回の襲撃も、間違いわね」

「ああ。クップルングの主要メンバーさえ、抑えとけば、かなりの

有利になるからな。
　ファーロ側はうまくいったよ。奴らは、強い指導者が入れば、誰だって構やしない。自分たちが生きていら
れるのならばな」
「ここのボスを倒し、強さによってファーロ団を乗っ取ったってわけね。でもね、黒粘土。同じ方法でうちの連
中が支配できると思って？」
「やってみれば、わかるさ。自分が生き延びるためにはなっ」
　力をこめて言い放った男は、同時に短刀の柄に手を当て、女頭を巻きつける糸を引き寄せた。
「あなたは、間違っています」
「……」
「強い力だけで生き延びることはできません」
　助針はいつのまにか、紫羅の前にいた。
　彼女の前に立ちはだかって。
「…」
　男の持っていた短刀は引き抜かれることはなかった。そもそも、男自体身動き一つしていないのだから。
「じょ…」
　助針の指先には細い針があった。
「大丈夫です。彼は生きてますよ。ただ、しばらくの間、目覚めることはできませんが」
　説明したものの、紫羅の鋭い視線は助針はから離れることはなかった。
　『なぜ、動く事ができたの？』と、その目は無言に語っていた。
「お恥ずかしい話、言いたくなかったのですが…一瞬だけならば。それも、ただ一度だけなら、動く事ができ

るんです。火事場の馬鹿力というヤツですね…
だけど…」
体がふわりと揺れた。
「助針」
「あまりにも消費エネルギーが大きいので、その後、動けないんです…」
座り込み、目をグルグルさせながら情けない顔で紫羅を見上げた。
「…」
紫羅は身動きがとれないまま呆れていたものの、ふと頭によぎった疑問を、助針に聞いた。
「助針。今『強いだけでは生き延びられない』って、言ったわね。じゃあ、何が必要なの」
「そりゃ『助けられる』ことですよ。他の方に助けられるからこそ、自分の弱さを知り、助けともらった方に感謝
することができます。
上に立つ方ならば、己の弱さ、弱点を知らなければ、大きくなれません…と、私は思います。
といっても、私は助けてもらってばかりですが…」
ははっと、力なく助針は笑ってみせた。
「……。まあ、確かに。この状態じゃ、助けらもらう以外にないわね」
「でも紫羅さん…」
「何？」
「2人とも助けてもらわなければならない状態で、敵が現れたら、どうしましょう」
不安という言葉は近づいてくる足音により、現実と化してしまった。
「どどど、どうしましょ」
「どうしましょうって、助針、男でしょ。この黒雪印の糸はねぇ、

無茶苦茶丈夫で切れないのよ。まったく身動き

が取れない、私と違って動けるでしょ。戦えるでしょ」
「えええっ。そんな無茶苦茶な事、言わないでください」
「頭である私が弱さを見せるのは、相手を信頼しなければならない事。助針、私の信頼を裏切るつもり」
都合の良くなっているが、紫羅の言葉は正論でもあった。
「…。わかりました。私は、紫羅さんのために、戦います」
「頼んだわよ」
助針はふらつく体でなんとか立ち上がり、細い針を剣の様に構えた。
針先がふるえ、全身に汗が浮か噴出しいく。
それでも助針は、扉の先を睨むことを止めなかった。
足音が目の前に現れる。
「……」
助針は、足を前に踏み込み、現れた者に…
「ストーップ、助針」
その直前で紫羅が止めた。
「へ？」
顔真っ青、汗だくだくの助針は攻撃しようと伸ばした腕を慌てて戻したのと同時に、扉から現れた者の体当

たりを見事に食らった。
「頭っ、ご無事ですか」
現れた者は、大切なボス以外目に入らなかったらしい。
『何かに当たったてような…』と思いながらも、カードゲーム時にいた大男は紫羅の前まで進んだ。
「あんたが無事で何よりよ、でか虫」
でか虫。
「助針。この名前の通りよ。この大男。丸虫、細虫の末弟」

衝撃的な事実が発覚されたが…大緊張と体当たりをくらい気を失った助針の耳に入ることはなかった。
「？何です頭、この方は？」
「でか虫。あんたが捕まえたてきたんでしょ。彼は助針よ。頼りないけど…信頼できる、ね」
「？」
哀れな助針に、紫羅は優しく笑みを浮かべた。
しかし、細虫と丸虫の姿に気づいた紫羅は、険しい表情に変わった。
部下だった男を見下ろすため。

陽光と海

「かしらー」
盗賊のアジト2階。
とんとんと音をたてて上がってきたのは、クップルングの七不思議とも言われている『謎の三兄弟』の次男、長
身の男、細虫だった。
「れ？頭は？」
2階には盗賊団のトップの少女が日向ぼっことして使っている、お気に二入りの椅子があったが、そこにはち
いさな人形しかいなかった。
いや、着せ変え人形みたいにちいさな長男、丸虫だった。
「さあ？ま、大方、助針さんの所だろう」
「そう」
細虫はくるりと回り、小さな兄に背を向けた。
「細虫、邪魔するなよ」
「邪魔？…兄さん。どういうことだよ」
「その理由、私も聞きたいわね」
2階の窓から声と共に現れた猫…みたいな少女は、ここの女ボス紫羅であった。
「そういうことだよ。
それより細虫。頭に用事あってきたんだろう」
丸虫は透き通った薄い羽をぱたつかせると細虫の方に移動し、椅子を明け渡した。
「うちに届いたんだけど」
「手紙？でも、助針宛じゃない」

「頭に伝えておこうと思って」
「おはようございます～」
都合のよいところで、階段を上がる物音のあとから、のんびりとした声が聞こえた。
「ひどいですよ～紫羅さん。途中で屋根に飛び乗るなんて。私、危うく、迷子になるところだったんですよ」
「ほう。仲良く出勤か」
「何よ、丸虫。この温室金魚をひっぱってこないと、昼まで寝ているし、スリにあって誘拐されちゃうじゃないのよ
」
「失礼なこと言わないでください。第一、お湯で金魚が住めるわけないじゃないですか」
…　…　…
「…高級金魚鉢に住んでいた、お魚さん、お手紙が届いてるわよ」
「手紙？父さんからだ」
助針は蝋で止めた封を開けて、中の文書を取り出した。
「ねえ、兄さん…」
「あれは、ろうそくをとかし、印鑑となる紋章やその者の証となる印を押して冷やしたものだ。蝋で止めた書は誰
も封を開けていないと言う証拠になる」
「ふうん。さすがは兄さん」
「ところで頭。助針さんを高級や温室なのはわかるが、なんで金魚なんだ？」
「助針って、魚系の一族なんだってさ」
「…って事は、助針の前で魚料理は食べられないし、魚の手料理はタブーだって事だ、頭よ」
「…なんで、私にふるわけ？」
「父さんは、今回のレポートに満足してくれたようです」

３人の会話を来ていなかったらしく、手紙を読み終えた助針は、会話の感想をのべることなく、手紙の内容を
簡単に説明した。
さんざんな目に巻き込まれているもの、ちゃんとレポートを書いて、しかも送っていたらしい。
「情報屋の修業ね」
「で、今度は…」
「今度はって…助針。クップルングはもう、用無しってこと？」
「用が無しなんて、とんでもない。大変、お世話になりましたよ」
「そう」
紫羅は、自分の顔をおもしろそうに見つめる丸虫に気づき、つんとすましてから、助針を見上げた。
「まあ、頑張ってらっしゃい。でも、いーい、助針。親切に声をかけてくれる人についてっちゃだめよ。例え、お菓子をくれてもね」
「子供じゃないんですから」
「どうだか。世の中、良い人ばかりじゃないんだからね。じゃ」
紫羅は男たちから背を向けると、窓から退出した。

「猫が魚を逃すとは、なぁ」
アジトの屋根にいる猫は、近づいてきた丸虫に一瞥した。
「あのねぇ、丸虫。ただ一度助けられただけで、恋に落ちる女じゃないよ。私は」
「鏡を見たらどうだ、紫羅。顔が悲しそうになっているぞ」
部下であり、親友でもある丸虫は『頭』と『紫羅』。名前を区別して呼んでくれている。
「丸虫の目が、そう見えてるだけよ」
「サクリファイスのお姫様の一途さを見習って素直にならどうだ？」

丸虫は羽根をはず動かして、紫羅の拳から逃れた。
「……ったく」
丸虫の姿はなく、紫羅は屋根の上で昼寝を続行するものの、寝返りをうつばかりで、まぶだか重くなる気配なかった。
「……」
紫羅は屋根の端まで進むと、くるりと一回転して下にある窓、部屋の中へ入り込んだ。
「わっ」
とたん、誰かがが声をあげ、あわてて避ける姿が目に入った。
「あれ、細虫」
「危ないじゃないですか、ぶつかったらどうするんですか」
「ぶつかる所にいるほうが悪いのよ」
「…機嫌が悪いですねぇ、頭」
「そういう細虫は嬉しそうね」
紫羅はふうとため息をつき、椅子にどっかりと座った。
屋内は、日を大量に浴びることはできないものの、心地よい海の風が紺色の髪をなびかせた。
細虫の声がなければ、そのまま、昼寝を始めたかもしれない。
「頭は、どう思ってるの？助針さんのこと」
ぴきっと青筋が浮かび上がった。
「細虫、あ～んたまで」
「あ、いや。俺は兄さんと違って、素直に聞いてみただけだよ」
『何が、違うんだか』と思いながらも、紫羅は素直に答えた。
「あまりにも情けなくて、目が話せないだけよ。何にでも興味を持つ始めた子供と同じで」
「他は？」
「ないわよ。それだけよ。まったく」

再度ため息をつき、こめかみに手を当てている紫羅は、細虫が見せる表情の変化に気づくことはなかった。。
「……」
助針…あいつは…
ほうってはおけない。あまりにも弱々しいから。
何もかも無防備すぎて、見ていられない。
なのに…
「…かしら……」
「…え？あ、悪い細虫。ちょっと、出かけてくるね」
紫羅は、窓から外へ飛び出していった。

「…そりゃ、前回は、少し…見直したわよ」
真顔になって独り言を言えるのは、人通りの少ない路地の奥を歩いてるからだろう。
『紫羅さんのために、戦います』
体を震わせながらも、武器を向けていた助針の姿。
「…どうしてくれるのよ…余計な」
紫羅は慌てて口を閉ざした。
女と頭の勘が働いてくれたおかげで、気づかれることはなかった。
「…向こうの方に歩いていったのは」
「間違いないだろうな」
「ああ。隙のない動きをする美少女は、そう滅多にいるものじゃない。クップルングの女ボスだ」
『あら、嫌な奴なのに、いいこと知ってくれるわね』
頭のなかでそう発言してから、紫羅は素早く耳と気配と記憶をはりめぐらせた。
『あの声は、前回、壊滅したファーロの連中ね。大ボスは黒粘土に消されたけれども、幹部クラスはまだ残ってたか…』

懐から、糸付き爪を取り出して、服の中に隠してある投げナイフを確認した。
『3人。いや、4、5人はいたわね。上のクラスだから腕は確かなもの。同時に相手しなければ、こっちの…』
「あれ？紫羅さん。こんな所で何してるんですか？」
背後にあった建物から場違いな声と、この時ばかり大きな声で助針が現れた。
「あっちだ」
かけ声と同時に聞こえてきた足音に、紫羅は助針の手を引っ張り走り出した。
「どうしたんですか？そんな恐い顔をして？
もしかして紫羅さん。裏ガイドブックに載っていた。あのお店に行くところだったんですか？」
「馬鹿。のんきにしゃべってないで。走る事に専念しなさいよ」
助針の手を離した紫羅は一度振り返り、手にしていたナイフを放った。
近づいてくる気配を感じたから投げて、案の定、間近にせまっいた一人がいて、そこから声があがった。
どこに当たったのかすら見確かめる余裕もなく、紫羅はひたすら走った。
「ったく。助針のせいよ。残党を一人で片づけるつもりだったのに」
「面目ない。
でも紫羅さん」
「何よ」
「行き止まりです」
追手をまこうとひたすら走った結果、先には道がなかった。
振り替えって他の道を探す前に、追手と鉢合わせになってしまう一本道。
「お約束通りの万事休す状態ね」
ただ一つ違うとすれば、前方にある行き止まりは壁じゃなくて、

海になっていること。
トンバラズの港町。
裏通りは大海の近くで、ボートとかが倉庫とかに行き来できるように狭いが船道がつくられていた。
狭い舟道を進めば海に迎えるけれども…。
「…紫羅さん。海へ逃げましょ逃げましょうか、それとも戦いますか？」」
「幹部クラス5人相手に、しかも助針付きでいっぺんに戦うのは無理よ。連中がどれほどの腕をしているのか、
判断できないときは、なおさらのこと」
「じゃあ、海ですね」
「でも助針。どんなに速く泳いでも、連中の目をあざむくほど遠くにはいいけなわよ。ましてや海よ。いくらもぐっ
ても、浮いてきちゃうわよ」
素早く海中に潜れたとしても息継ぎで海面に顔を出せば、狙い撃ちされるだろう。
「大丈夫です紫羅さん。私に任せてください。浮き上がることなく、海中を泳ぐげる種族ですから」
「え…本当」
「温室育ちの金魚でも、魚ですからね」
この状況下、助針を信じるしかなかった。
遠くの方から響いてくる足音と、追手らしき点がゆっくりと大きくなっていた。
「じゃあ紫羅さん。いいですか、決して暴れないでください。海中に慣れていないのならば、目を閉じていた方が
いいでしょう。
向こうに止まっている船の近くまで行きます。全速力で泳ぎます

が、もし苦しくなったら、叩くなりなんなりして、
私に知らせてください。ずぐに浮上します」
「…わかったわ」
「じゃ、いきますよ」
背後にたっ行いた助針は左腕で紫羅を小脇に抱えた。
まるで猫のヌイグルミを抱えてるような感じである。
「ちょっ…」
紫羅が反発する暇もなく、助針は海に向かって飛び込み紫羅は慌てて目を閉じた。
…　…　…　…　…　…
何も見えない状態の紫羅は、冷たいの水の感触と共に押しつけられるような水の力を知った。
潜ったばかりの体は下に向き、自由になっている手で鼻をつまんだ。もちろん、水が鼻に入らなくするため。
「……」
体が横に向き、徐々に上へ向かっている…ような気がする。
…そろそろ息が苦しい。
紫羅は、紫羅なりに考えた最善の策、大量に吸った空気を少しずつ吐き出して、苦しい気分から逃れようとした。
「……」
助針の力を信じられるので、自分の事は自分で解決したかったから。
助針の腕と、背中から感じ取れとる助針という存在。
…頼もしさを実感することができた……。
「ぷはぁっ」
海面に出る気配を察知した私は、からっぽになった肺に空気を入れるため口を開けた。

もし、まだ海中にいたならば、大量の海水を飲んで大変な事になっていただろうけども…女と頭の勘は間違う

ことなく、大量の空気を吸い込むことができた。
「紫羅さん、大丈夫でしたか？」
「少しでも遅かったら、アウトだったわよ…はー、苦しかった」
自分の生命を確保できた紫羅は、辺りを見回した。
２人の両側には大きな船があった。
ありがたいことに人の気配や声はなく、船の上から咎められる心配はないようだ。
「追っ手、大丈夫かしら」
「一応、海中深く潜りましたから、ここにいる間は、見つからないでしょう」
「戻ったら、一掃しておかないとね…それよりも助針、いつまで小脇に抱えているのよ……って離されたら沈んじゃうでしょ」
港町の盗賊なのだが、猫性質なのか、ほとんど泳げない女頭は、ぎゃーすかさわいだものの、大人しくするしかなかった。
「…すみません。今すぐ上がりますから」
「…いや。まだ、ここにいた方がいいわ。もう少し、慎重にしとかないと」
「紫羅さんが、おっしゃるのならば。そうしましょう」
口を閉ざした紫羅は、背中から感じとる助針の体温に気づいた。
「…どうしました？紫羅さん。顔が真っ赤ですよ」
「何でもないわよ…。それよりも助針。助針は、これから先、どうするの？」
「どうするって…父さんが一人前の情報屋として認めてくれるまで、

指示された所のレポートを書くしかないでしょう。多分、世界中を回るんでしょうね」
「そう。
…ねえ、助針。あなたの父さんは、今回のように自分の名前を書いてある手紙を渡して、安全な所をレポートさせている。それって人が指図して、敷いたレールを走るだけじゃない？レールの上だけ走るなんて、いつまでたっても一人前にはなれないわよ」
「…痛い言葉ですね。でも、正しい言葉です」
「ならば助針…」
「……」
助針はそれよりも早く首を横に降った。
「紫羅さんの言う通り、レールの上を安全に入ることは修業したとは言えません。でも、今の私はあまりにもレベルが低すぎます。まだレールの上すら、満足に走れる状態ではありません。
今の状態で無理にやれば脱線して動けなくなる自分の弱さを痛いほど知っています」
「……」
「そんな状態であっても、いいえ、それだからこそ。私は強くなりたいです。父さんや兄上たちのように」
「……。助針ならば、できるわよ。…頑張ってね」
応援する紫羅の声はどこか弱くなっていた。
助針がどこかに行ってしまう事を知り、紫羅は自分に元気がなくなっていく感覚に気づいた。
元気がなくなる自分…すなわち助針を意識している事に…紫羅は

切ないほど気づかされていた。
「紫羅さん？」
紫羅は後頭部を助針の胸の辺りに沈めた。
助針の鼓動が耳に届く。
「助針…。
絶対、ここに。どんなに遠くまで行っても、ここに遊びにくるのよ。いいわね…」
力のない命令。でも、助針はうなづいてくれた。

「かしら～」
「……」
「しらっ」
「え、わ。何だ丸虫。驚かさないでよ。屋根から落ちたらどうするのよ」
クップルングのアジトではなく、大通りにある別の建物の屋根に紫羅の姿があった。
仲間の声に女頭の表情に戻ったが、行きかう人たちを見下ろしていた紫羅の目はぼうっとしていた。
「頭。残党の処理終わったよ。思ったより手応えはなかったな。でか虫一人でカタがついたんだし」
「そう。ご苦労さん。これで一件落着ね」
安堵のため息をつく紫羅に対し丸虫は大げさなため息であった。
「助針さんの後をついてったらどうだ？」
「何それ。もしかして、私にお節介やいたのは、ボスの座につこうという魂胆があったからなわけ？」
「違うよ。紫羅以上にクップルングのトップになれる者はいない。だけど、今の紫羅じゃ、それが無理になってい
る」

「…まあ、厳しいお言葉ですこと」
「中途半端なままじゃ、魚は本当に手からすりぬけるぞ。紫羅の事だ、何も伝えていないんだろう」
「……」
…あれだけじゃ、助針には伝わっていないでしょうね。
何も言えない私に、丸虫は小さな腕と人差指を向けた。
その先には、盗賊団を後にした助針の後ろ姿があった。
「ん？」
助針が進む方向から、一目で怪しげな男が二人、助針の前で止まった。
怪しげな男たちは、手を揉み腰の低そうな態度で、しきりに後方にある馬車を指さしていた。
「……前に進んだということは、あの馬鹿、馬車に載るつもり」
開いた口が閉じるよりも早く、紫羅は2階建ての屋根上から飛び降り、見事な着地もさることながら、４本足で
走ってるのではないかと疑う速度で駆け抜けた。
一行が紫羅の存在に気づいたときにはもう地を蹴り上げて1人のあご下に当て、もう1人を戦意喪失武器を
使って、動きを封じた。
「し、紫羅さん」
「ったくもう、何やってるのよ。知らない、しかも怪しすぎる奴には気をつけろって、あれほど言ったでしょ」
「でも紫羅さん…」
「何よ」
「この従業員さんたちは、サクリファイス館の送迎馬車を担当している方々で、親切に送ってくれるところだったんです」

「…ったく、とんでもないガキだ」
「あら…」
よろよろと起き上がった人たちを見て、うなづくしてかなった。
「一歩間違えたら、どういうことになるか…わかっているんだろうな、盗賊のトップさんよ」
その人たちは、紫羅の顔を知っている顔見知りの人たちでもあったから。
「…。悪い事しちゃったわね」
「すまないな、お二方。うちのボスがへまやっちゃって」
女頭の後を追って飛んできた丸虫が、怪しいげな男たちに謝罪した。丸虫の姿に男達が驚く様子もなく、こちらも顔見知りのようだ。
「…って、丸虫。どういう事よ、これは」
「こういう事だ。次のレポート先はサクリファイスだったんだよ」
「な、何よそれ、そんなに近くなの？」
「え、紫羅さん知っているんですか？」
「知っているも何も…」
私は一度、丸虫を見た…。
「…ふん。そうね。あんたみたいな子が、あの屋敷に入ったら、出てこれないかもしれないから…私がボディガードになってあげるわ」
「え、いいんですか？でも、ここは？」
「大丈夫よ。目と鼻の先だし。それに、あそこには、もう一人の親友がいるからね。久々に会いたいし」
「そうですか。では、紫羅さんのお言葉に甘えさせていただきます」
というわけで、私は助針と一緒に乗り込んだ。
今度こそは…。

サクリファイス

「これから行くサクリファイス館から脱走したって話したわよね」
ガタガタとゆれる馬車の中で、紫羅(しら)は過去を語った。
トンバラズの港町を出発し、街道をしばらく進んでいたが逸れて、森に向かっていた。
「ええ。でも、脱走した紫羅さんが、また行って…大丈夫なんですか？」
「それは平気。今では常連の一人になっているから」
「常連？って、紫羅さん。そもそも『サクリファイス』というのは、何なのですか？」
「人売りよ」
「…ひと、って奴隷販売じゃないですか」
「その通り、で、ちょっと違うわね。あそこの商品は珍しい人種、鳥の翼や角、しっぽとか、変わった一族の子たちだからね。もちろん、多人種ハンターとかいう悪い奴が勝手に捕らえてきたものだけれども」
「悪徳業方に、変わりありません」
「悪徳業方、ねえ、じゃあ、あたしら盗賊団だって立派な悪徳業方ね」
「……。それは…」
困惑する助針(じょしん)を見て、紫羅はにやっと笑った。
「世の中、真っ白に包まれた純白だけで成り立つことはできないのよ。もちろん、盗賊稼業を正当化できないけれども」
「…わかっています。自分の情報屋だって、綺麗事で成り立たないし」

「ならばよろしい。
で、話を戻すわよ。うちら盗賊団が個性派ぞろいなのは、ここの館で能力のありそうな子を買っているからな
の」
丸虫兄弟や影といった姿を思い浮かべ、納得する助針であったが…窓外の光景を見て不安を口にした。
「…ところで紫羅さん。だんだん森の中に向かっているように見えるんですが…、大丈夫なんですか？」
「そりゃサクリファイスは人里離れた森の中にあるからね」
「え、そんな所に」
「闇商売なんだから、役人の目の届かない所で営業するのは当たり前よ」

一応、うなづいた助針であったが、しばらくして、また不安を口にした。
「紫羅さ～ん。本当に大丈夫なんですか？どうも、廃墟みたいな建物に向かっているような着がするんですが」
「廃墟って言ったって、門が半分開きかかって塀が途中から崩れていたり、建物に蔓が覆っているだけじゃない
」
紫羅の言葉は、その建物がまさしく『サクリファイス』である事を指し示していた。
「…紫羅さん。本当にあそこなんですか？化け物がいるっていうのに？」
助針は荒れ果てた建物の前にいる生物を指差し、紫羅は…
「あはははっ」
と笑い出した。
「何がおかしいんですか？」

「助針。あれは確かに化け物だけれども。ここのサクリファイス館の主人、奴業(やっごう)よ」
「えぇっ」
紫羅の言葉通り、馬車は廃墟のような建物につき、降りる化け物が人間語で歓迎してくれた。
「ようこそ、サクリファイスの館へ」
あまり見たくないと思いつつ助針は館の主人を観察してみた。
でっぷりとしたお腹に、なんとかくっつけたような手と足。
その体に入れるだけつめこんだ脂肪。
どう見ても館の主人は人ではなく化け物が無理やり人間に変装したとしか見えなかった。
顔も脂肪たっぷりで目がどこにあるのかわからないほどめり込んでいるが、脂肪の間からみえる小さな目は
異常に鋭く、ただの人間じゃないことを示していた。
「遠路はるばる、ご苦労さまでした助針様。お父様の方は、お元気でいらっしゃいますか」
鋭い目をした化け物主人は、濁った声で助針の名を呼び、丁寧にあいさつをした。
「知っているんですか？私の事を」
「そりゃ、もちろんですとも。世界中の情報が集まる町。我々裏業界の者にとって、なくてはならない存在です。
ましてや上集(うえしゅう)様のご子息であられる助針様が、こんな辺境の廃墟におこしいられるとは、この上
ない光栄でございます」
「相変わらず、口のうまいこと」
化け物、いや奴業の感激に見ずをさしたのは、今ごろ馬車から下りてきた紫羅である。
「胡麻を擦って糸を高く売りつけるつもりでしょうけれども。私が

いる限り、そうはいかないわよ」
「とんでもない。助針様をだますなど。お望みでしたら『黒雪の糸』などいくらでも差し上げます。
…ところで、あなた様は？助針様にお連れの方がいるとは手紙には書かれていませんでしたが」
「やつご～。冗談なのか、脂肪を脳までつめこんで本当に忘れたのかわからないけれども。常連に言う言葉じゃないわよ。忘れたんならば、おしえてあげる。私は紫羅よ、し～らっ」
「…。ああ、港町のボス猫さんでしたか。
いやぁ～、この前はどうも」
…奴業さんの目がさらに鋭くなったような気がします。
「紫羅さん。この前って、何をしたんですか」
「ちょっとね。館の大事なものを外に出しただけよ。でも、ちゃんと返したんだからいいじゃない」
紫羅さんは、しっかりと盗賊仕事をしているらしい…。

「それにしても、すごいですねぇ～。外見だけではとても想像できませんよ」
廃墟のような建物の中へ一歩踏み入れてみると、そこはまったくの別世界だった。
純白の壁に大理石の床。もちろん、シャンデリアが優雅な明かりを部屋いっぱいに放っていた。
電気のない世界なので明かりはマジックアイテムを利用しているのだが、高級品である魔法道具で昼間のように明るくできるのは相当な儲けが必要である。
高級品揃いだが、成金に近いような派手な内部。

案内してくれた部屋も成金…豪華なもので『海の間』と呼ばれているらしく、一室にある部屋（とって言っても、かなり広い）には大きなプールがあった。
「…すごいですよ、紫羅さん。ちゃんと塩が入ってます」
「助針が魚系の一族だって知っている証拠ね」
「ところで紫羅さん」
部屋に戻ってきた助針は懐から手紙を取り出した。
「父上から宿題がでているんですが」
「宿題って小学生じゃないんだから…で、何なわけ？」
「はい。ここの主人が持つ秘密です。父上の手紙には、奴業さんには秘密があって、レポートの提出と一緒に、それを見つけてろと書かれてあるんです」
「ひみつ～ぅ。あれの存在自体が謎なんだけれどね。で、何かわかった？」
「いえ。まだ、1度しか会っていませんから…。ああ、はい、どうぞ」
話している途中でノック音がして返事をすると、ここの従業員さんが、トレイにお菓子やお茶を運んできてくれた。
「お茶をお持ちしました」
黒髪の綺麗な女性を目にした紫羅は、その人を見てにやにや笑っていた。
「相変わらず、脱走しまくっているのね。でも、今はまずいんじゃないの？」
「？」
紫羅さんは謎の言葉を従業員さんに言った。
疑問に思っている私を無視して、紫羅さんはトレイをテーブルに

置いた瞬間を見計らって、その女性に抱きつ
いた。
「久しぶりね。深黒（みこく）。元気で何よりよ」
「紫羅も、変わってないじゃない。進歩はしているらしいけれども」
「あの～紫羅さん？いい加減、教えてくれませんか？」
　このままでは、ずーっと置いてぼりにされそうなので、悪いと思いながら口をはさみました。
「そういえば、助針いたんだっけ」
「紫羅さん…」
「彼女は深黒。
　黒雪（ブラックスノー）と呼ばれてて、このサクリファイス館で飼われている奴業のペットよ」
　サクリファイス、人種売買が行われている館、そこで飼われている存在。
　とてつもなく過酷な環境にもかかわらず、紫羅さんのお友達の深黒さんに笑みがあった。
「ペットって愛人みたいに聞こえない？
　言っておくけど、あの牛蛙（奴業の事）は糸を売るために、閉じ込めているだけよ」
「丸虫から聞いた情報だと、ベタ惚れにされてるって聞いているわよ」
「指一本、触れさせた覚えなんてないわよ」
「あの～。私を置いて行かないで下さい」
「あーもー、助針。久しぶりの再会なんだから、口を出さない」
「はい…」
「紫羅。かわいそうじゃないの。
　で、そっちの人は？どこまでいったの？」
「何か勘違いしてるようだけれども、居候よ」
　速答で言わなくても…

「助針と申します。一人前の情報屋になるための修行をしています」
「サクリファイスに？」
「はい。ここのレポートと、秘密を捜すために…」
「秘密？牛蛙の秘密なら知ってるわよ」
行き詰まっていた問題に、いきなり突破口が現れた。
「毎日、鏡を見て美の研究をしているのよ。あの姿で」

「助針。真面目な顔で書いてるわよ」
紫羅は、薄暗い闇中で親友に言った。
従業員のふりをして館内を脱走した深黒は、自分の部屋に紫羅を案内した。
「そう言ったって、事実なんだもの」
そこは助針といた部屋と変わらない豪華なもので、さらにセンスの良いものだけが置かれていた。
彼女の注文に館の主人が忠実に買い与えたものだろう。紫羅は彼女の存在をか改めて知った。
黒雪（ブラックスノー）
紫羅にとっては、館を脱走する時に力になってくれた恩人である者。
武器として使うほど、細く丈夫で光沢のある糸『黒雪印の糸』を創り出す者であった。。
深黒により館は潤っているようだが…それだれでは、こんな豪華な部屋には住めないだろう。
「助針さんって、優しそうでいい人ね」
「……」
「思うようにいってないわけね」
「最近になって、気になり始めたのよ」
さきほどは居候と速答したものの、さすがに親友の前では素直に思いを口にした。

「でも、本当に『好き』ていう特別な思いなのかもわからない。…
それに、ここのレポートを提出したら、どこかに
行ってしまうし…」
「ついていけばいいじゃない」
「それはできない」
紫羅はためらうことなく答えた。
「助針は気になるけれども、仲間をおいていくことはできないわ。
あの仲間とは強い絆で結ばれているのよ」
「じゃあ、仲間と一緒に付いていくっていうのは？」
「…」
「無理か。色々と複雑なのね」
「そう。
で、深黒の方は、まだ牛蛙の主人に気づかれず、密会を続けている
るわけ？」
今度は、深黒の方が沈黙する番だった。
「あんたも、変わっているわよねぇ。自分を捕らえた『多人種ハン
ター』を好きになるなんて」
「…仕方ないでしょ。隷度（れいど）は、特別な人なんだから」
「あっちは、世界中を転々として売りつける時にしかこない。その
僅かな日のためだけに、ここにいるなんて。私
には考えられないわよ」
「ここにいる事については、後悔してないわ。
あの時、紫羅たちと一緒に脱走していたら隷度とは2度と会えな
いのだから」
「まあね。隷度には告白していないのだから。会う機会がなくなる
からね」
「……。会うだけで精一杯なのよ。それは紫羅だって同じでしょ」
紫羅は反論できなかったものの、親友の顔のそらし方に違和感を

持ち、言葉を放った。
「何かあったの？」
「隷度。来ないの。館内から入手した情報だと、もう来ることになっているのに…」
事故か、とうとう捕まったのか。と紫羅は思ったが、さすがに口にはしなかった。
「多人種ハンターのことだから、戻る途中、めずらしい獲物を見つけたんじゃないの。それに船旅なんだから、
多少ずれることぐらいあるわよ」
「…そうよね。そうだよね」
わずかに微笑んだ深黒を見て、紫羅は隣に座ろうとしたが、親友にとめられた。
「私とは、いつでも会えるんだから彼との時間を大切にしたら。時は瞬く間に過ぎて行くのだからね」
助針の所に戻れと指していた。
「…。しばらく、滞在するから、ちょくちょく遊びにいくから」
紫羅は、脱走用出入り口に向かった。

このままで別れたら、2度と会えないかもしれない…。
深黒は、思い人が立ち寄る所にいるから会えるけれども、私の場合はそうはいかない。
かといって港町から離れるなんて…
ぼうっとしてたから、前方の異変に気づいたのはだいぶ立ってからだった。
「？」
深黒が見つけ出した、脱走用通路には明かりがほとんどない地下。
暗視能力のある私は何気なく歩いていたけれど。
足がとまった先はT字路になっていて右に曲がれば部屋に出られるのだけれども、気になったのは左側。

左は数メートルしかない行き止まりだけれども、そこに何か置かれている。
「なに？この異臭は…」
不快な匂いをかいだから気づいたもので、どうやら、それが原因らしい。（深黒の部屋に行った時、別の通路
を使った）
その布袋は1メートルはあるかしらね。
好奇心の赴くままに、袋を縛っている紐をといた。
好奇心は猫をも殺す…
その言葉が思い浮かんだのは、その後だった。

「え？紫羅さんですか？」
ノックされたドアを開けると、再び従業員姿の深黒さんが、今度は夜食を運んできてくれました。
「いえ。まだ戻ってませんが」
「あの猫の事だから、どっかで寄り道して。昼寝でもしているのかしらね」
「今は夜ですが？」
「…。まあ、いいや」
深黒さんは夜食をテーブルに載せると、運んできたばかりの飲み物を口にした。
「ところで、助針さん。部屋は一つしかないようだけれども、問題はない？」
「部屋ってここのことですか？」
「紫羅も、この部屋で滞在させるつもりだからね」
「大丈夫ですよ。この部屋は広いですから。紫羅さんの、ものすごい寝相でも、被害にあうことはないでしょう」
「…それって、一つや根の下で寝泊りしていたって事？」

「ええ。他の方たちと仲良く雑魚寝することも、よくありました」
「みんなと一緒に、ね」
「？それ以外に何があるんですか？」
「恋愛以外にないでしょ」
「れん、あい、ですか…」
「そうよ。ここのレポートが終わったら、離れ離れになるのよ」
「…そうですね」
視線をそらす助針を見て、深黒は『助針にも気がある』事を確認した。
「覆水盆に返らず。１度離れた水は元に戻らないわ。時も、逆戻りできないものなの。後で後悔したところで、何もならないのよ」
「それは、そうですね。でも…」
「紫羅に気があるのならば、つなぎとめる『何か』をしておくことよ。例え、離れても、つなぎとめる何かがあれば、また、会うことができるのだから」
深黒さんは、言いたい事だけ言うと、退出していきました。
私に考える時間を作るために。
「……」
紫羅さんはかわいい外見にはに合わない人で、仲間思いで、何かあろうなら危険を省みず、自ら飛び込む。
でも、その時に見える紫羅さんの背中が、あまりにも小さくて弱々しく思えた。
これは、紫羅さんを守ってあげたいと言う気持ちなっているかもしれない。
守ってあげたい。でも、今の私ではあまりにも足りない。
私のレベルが低すぎて、紫羅さんを守るどころか、足を引っ張ってしまう。

「……」

「…うかつだったわね」
袋の中身に驚いてなければ、背後からの攻撃をまともに受けるはずなかかったのに…。
まともに受けて、意識をなくして、きがついたらどこかの部屋に運ばれていた。
第1話で助針にしたように、縄でぐるぐる巻きにされて…。
床は柔らかなじゅうたんで、そいつの足がめり込むほどの高級品だった。
「いくら盗賊でも、そこまでやれば、縄を解く恐れはないないだろう」
ぎっとんぎっとんの化け物。奴業は、異様な目で見下ろしていた。
「クップルングの盗賊を甘くみていたようだな。犬でもないのに鼻が利くとは」
「猫の目は鋭いのよ。
で、あの袋の中は何なわけ。いや、誰?」
中身は、そういう事だった。
「ただの生ゴミならば、深黒の知り合いであっても消そうとは思わん。もちろん、こんな所にまで連れこむことも
ない」
「相当なものね。私が推測すなら…」
「残念ながら、多人種ハンターのものではない」
「違うの」
先に言われ驚く私を見て、奴業は満足げに笑った。
笑って…笑い続けた。異様なほどに。
奴の書斎と思われる部屋いっぱいに響いて…突然、止んだ。
「な、何よ。その笑いは」

「冥土の土産に教えてやろう。
あれは、あんたも知っている奴だよ」
背筋が冷たくなった。
「だ、誰よ。まさかうちの子って言うじゃないでしょうね」
「あんたの部下なんか消して、なんの利益になる。
犠牲館と呼ばれるｓａｃｒｉｆｉｃｅ（サクリファイス）で、あんたも知っている男は、そう多くはないだろう」
「……」
私は必死に過去の記憶を手繰り寄せてみるものの、ここで知っている従業員なんて…
「まだ、わからないのか」
その声ど同時に物音がした。ゴムのような柔らかい物を触るような音。
「……」
私が見上げた時、奴業はゴムのような覆面を手にとって、別人になっていた。
「忘れたか、小娘。自分の運命を変えた男の顔を」
２つのことがわかった。
あの脱出通路にあったのは、ここの主人奴業ので。
それに手を下したのは、ここにいる男だってこと。
「あんたの顔は嫌でも、忘れないわよ。多人種ハンターのボス」
隷度（れいど）
深黒の思い人がここにいた。
憎悪の目を向けるものの、内面は驚き混乱していた。
「奴業との商談がまともらず脅しかけたら、ああなっちゃってな。
ついでだから、ここの主人に成り替わって乗っ取る事にしたんだ」
覆面の中から出た隷度の目は、闇と変わらなかった。
「そんな変装セットで騙せると思っているの？」
「あんただって十分に騙されていたんだろう」
「……」

「別に変装を完璧にしなくたって。俺の行動に賛成するものだけを館に置いておけばいい。3年、いや、2年で完

全鎮圧するつもりだ。

それには…」

隷度は、私の目の前まで足を近づけた。

「いかに、この秘密を守り続けられるかだ。ここが安定するまで、外部からの接触は避けたい。それは、どういう

ことかわかるかい嬢ちゃん」

「…しゃべるなってこと」

「あと、上集さんの息子だ。

さすが情報屋だけあってサクリファイスに異変があったことは嗅ぎ付けている。だがそれがなんだかはわかっ

ていない。それで助針さんを向けたようだけれども。見つけられる恐れはないだろう…」

無言の間の隷度の鋭い視線はうつ伏せになって見えない私でも、向けられている事がわかった。

「私を消したら、深黒が黙っちゃいなえわよ。もちろん、うちの部下たちもね」

「猫だって足を滑らせして崖に落ちることはある。町の外とか森の中、危険はたくさんあるからな。事故ならば、

誰もがあきらめる」

「私は、あきらめません」

部屋の奥、外からその声は、響いてきた。

私の視線では、前方ある机が邪魔で見えないけれども、助針の姿があるは確信することができた。

「お入りなさい。客人」

隷度はテラスに近づくと、鋭い目をして立っている助針にガラス戸を開けて入らせた。
助針は唯一の武器、針を構えてはいるものの隷度が襲いかかってくるような気配はなかった。
「猫を見習って夜のお散歩とはよろしいですが、立ち聞きは良くありませんなぁ」
「紫羅さんの帰りが遅いので、捜しに来ただけです」
針を構えて一歩一歩近づいてくる助針から感覚をとるため、後退し、動けない紫羅の前まで移動した。
「紫羅さんをどうするつもりですか」
「人の数が一人、足りないようようですな」
『助針も秘密を知った以上は』と、その言葉は表していた。
「私は『情報の町』上集の息子です。未熟者ですが、情報を必要以上に口にしない掟は守れます」
「多人種ハンターの時は世話になったから、よく知っているよ。金を出せば、べらべら話すことも」
「……」
反論できなかったものの、助針はさらに一歩近づいて言い放った。
「紫羅さんに何かあったら、私が許しません」
助針は鋭い気配を放った。
1度だけ仕える、攻撃。
助針の能力については何も知らない隷度ですら眉をあげて警戒させるほど、その気配は鋭いものだった。
「ほう。大切な者を守る騎士ぶりはみごとですな」
「紫羅さんをお守りするため、全神経をかけて、あなたを倒します。それが、紫羅さんを思う証です」
「ほう。ドサクサにまぎれて嬉しいことをいってくれますな、お姫様」
ひゅっうと口笛を吹き、隷度は分の悪くなった紫羅を面白そうに見つめた。

「ばっ、馬鹿。こんな時に恥ずかしくなるようなこと、言わないでよ」
「でも、紫羅さんをお守りしたいのは、確かです」
「……」
「2人だけの世界に入っているところ、悪いが」
呆れかえった隷度が動き出した。
奴業の着ぐるみ着たまま、人種ハンターという荒れくれ稼業をしてきただけあって隙のない一歩を踏み出した
。
腰からナイフを取り出し助針に向け、戦闘が始まった。
「だめっ助針。深黒が悲しむ」
もし、紫羅の声が耳に入っていなければ、助針の針は着ぐるみを貫き、隷度のうなじまで突かれていたことだ
ろう。
紫羅の声を聞き、長い針は首の寸前で止まった。
助針の攻撃は突きだけで、防御というものはなかった。だから、彼にはナイフが向かっていた。
隷度の鋭い刃は、助針と同じ首の前で止められてた。
「引き分け…というところですかな」
と言って戦闘の終了宣言をしたものの、今の隷度に優越というものはなかった。
たった一つの単語を聞いたばかりに。
それどころか、彼の顔はさらに崩れた。
「主人。大変です。黒雪（深黒の事）が脱走しました」
扉をノックし、開けることなく報告した部下の声を聞いて。
「私がここにいる以上、館内脱走ね。
でも、この状況を見られる恐れはあるわよ」
「あ、ああ」

隷度は手にしていたナイフを助針に渡し、力を使い果たしたものの何とか動ける助針は、紫羅を拘束している縄を切った。

「隷度、安心して。私達はこのことを話さないわ。…というより親友でも、私の口には重すぎるから」

「そうか。ならば…頼む」

人を面白そうに見下ろしていた者とは思えないほど豹変し、心の奥底にある不安を口にした。

「頼む。深黒が巻き込まれないか…それだけが気がかりでならない。もし、深黒が秘密を知ったら…。制圧中の反対派の連中が何をするのかわからないし、その行動で何か会ったら…。

今、押し込めているあの牢屋こそ、深黒の身を守る場所はない。ここが安定するまで、この秘密は漏らされたくないんだ」

困惑し、目を見開く隷度の姿に約束し、私たちは主人の書斎を後にした。

館内脱走した深黒は、私達の泊まる部屋にいた。

私の帰りを確かめるために抜け出してきたらしく確認した深黒は、部屋に戻っていった。

後になって分かったことだけれども、隷度がここの主人を手にかけた理由は、深黒をここから出すためだった。

彼女を金で買い取ろうと商談を持ち出したものの、貪欲な主人は、それを断ったと言う。

しかし、隷度はあきらめらず、商談は口論となり…

「あれで良かったんでしょうか」
帰りの馬車で助針は口にした。
「今は、こうする他はないわ。余計な事をして深黒が危険な目に会わせるわけにはいかない」
「…そうですね」
ガタガタと揺れる馬車の音だけが響いた。
深黒のことについて考えるのをやめたとき、じっと見つめる助針に気づいた。
「紫羅さん。私は、あなたを守ってゆきたいです。でも、今の私では、あまりにも弱くて、お世話になってばかりです」
「そんな事ないわよ。今回だって、助針がいなければ、どうなっていたとか」
助針はにこっと微笑んだけれども、首を横に振った。
「ただ1度の攻撃。それだけれで強いとは言えません」
男としてのプライドがあるという言葉が含まれては反論することはできなかった。
「だから紫羅さん。少し時間を下さい。
かならず戻ってきます。
腕力でも。能力もでも。紫羅さんを守れる男として」
「はい。待ちます」
静かに言葉を放った後、紫羅さんはにいっと笑った。
「いーい、助針。絶対に戻ってくるのよ。戻ってこなかったら許さないからね」
「はい」
助針は返答し、それから…

猫の鈴

トンバラズという港町にあるクップルングという名前の盗賊団があった。
そのメンバーの一人、影(かげ)は夜空を見上げた。
闇の空はうっすらと濁り、瞬く星や夜空の女王、月も見当たらない。晴れたとしても今宵は新月。
「もってこいの日だな」
影は耳に集中し、さきほどからばしゃばしゃと聞こえてくる水、海水の音を聞き分けた。
「…そろそろだな」
影は動いた。
闇の中、その動きを見られる者はいなく、影が伸ばした腕は、つり竿のようにしなやかに曲がり、それをつかみあげた。
獲物は大きな猫、紫羅(しら)であった。
「ぷはぁ～。さすがにマズかったわね、今のは」
陸上に上げてもらった紫羅は、ぜーぜーと荒い呼吸をしながら危機を口にしたのであった。
呼吸を整えた紫羅は、猫系の美少女というところだろうか。とはいえ猫耳、しっぽはなく。
それどころか、影の上司、盗賊団の女ボスであった…。
「危なくなったら、もっと早く声かけてくださいと、あれほど言ったのに」
さて、闇の夜の海で二人が何をしているかというと。
「頭、そろそろ上達しましたか…水泳」
「闇中見えるくせして、よく言えるわね、そんな事」
「いや、頭から見てレベルが上がっているのかなあと…」
影は身の危険を感じた。
影は、名前の通り、人目に姿をさらすことのない謎のメンバーで

あった。
　とはいえ、影の姿を唯一見れる女ボスから見れば、謎の多い影さえも、八つ当たりの的となる。
「それって、全然上達してないって言ってない」
「いいえ。とんでもない」
　と思いつつ
『頭が食いかかってくると言うことは、本人も自覚しているようだな』と判断した。
「それよりも頭。そろそろ戻りましょう。丸虫も心配しています」
「…。丸虫の奴、人が帰ってくるたびに、泳げる人をコーチにしないっていうのよ。まるで、ここでの練習を見ているかのように」
「…　（小声で）同意見だと思います」
「え、何か言った？」
「いえ。私は向こうで見張ってますので、着替え終わったら声をかけてください」
　影はわざと足音をたてて、移動したことを知らせた。
「…まったく、もう」
　今から3年前…。
　個性の強い盗賊団に助針（じょしん）という名の魚系一族の男がやってきた。
　何でも一人前の情報屋になるため、修行しに来たという。
　その頃は対立する盗賊団と争っていて、助針は見事に巻き込まれてしまった…。
　まあ、無事に解決することができた。
　でも、助針も…親に提出する『レポート』を書いて、あっという間に去ってしまった。
　町は、あれ以降の騒動はなく、平穏だけが続いた。
　だからこそ、のんびり泳ぐ練習をすることができたんだけれども…。
「…にしてもおかしいわね。海水って塩分を含んでいて、浮くようになっているのに」

しかも、３年という月日がたっているのに…

「まさかとは思うけれども影、水泳練習を丸虫に報告しているわけじゃないでしょうね」

人通りのほとんどない道で、半がわきの髪をなびかせながら、紫羅は見えない部下に聞いた。

「私は何も言ってませんよ。おしゃべりなのは頭の顔です」

「顔に出てるかしら」

「あと態度にも気をつけたほうが良いでしょうね。夜の散歩から帰ってきた頭に近づかない方が良いと話題なっていますし」

「…。気をつけないとね。

港町を取り締まる女ボスが泳げないなんて、笑い話にもならないわよ」

それが闇の海でひっそり練習する理由であった。

それを知っているのは、丸虫と練習時の救助係、影のみ。

「女ボスのプライドにかけて、ぜーったい秘密にしておかないと。ましてや、コーチなんて…」

「気をつけてください、頭。細虫（ほそむし）が来ますよ」

影の警告を聞きつけた時、紫羅たちは人通りの多い道に曲がったところで、前方にある露店から紙袋を手にした細虫が現れた。

細虫。その名前の通り丸虫の弟にあたる。

「頭、奇遇ですね」

「ここ何日も『奇遇』が続いているような気がするが」

「そうか？」

細虫は影の嫌味を一言で片付け、紙袋から魚や野菜を挟んだパンを取り出した。

「影。兄さんが呼んでいたよ。大至急頼みたいことがあるって」

細虫の兄は、さきほどから出てきた丸虫であるのだが…１８０センチある細虫に対し、丸虫は１０センチしかない…。

しかも、２人とも背中には妖精を思わせる羽があるという、なん

とも謎の多い兄弟であった。
さらに、今回は出てこないが『でか虫』という3男もいる…。
「わかった」
丸虫は盗賊団の副ボスであり、細虫が気になるものの影は二人から離れていくしかなかった。

夜の港町は、酒や闇の力を借りてさらなる活気に満ち溢れていた。
そんな中、人の姿をした猫、紫羅は人ごみにはばまれることなく大通り、裏通りを進んだ。
「頭。夜の見回りなら、誰かに頼めばいいんじゃないですか？」
お供の細虫が不信に思うほど、長い散歩を
「気が向いただけよ」
紫羅は、自分の気持ちを見せまいと歩きつづける事にしたが、その顔はあまりにも沈んでいた。
「頭…どうしたんです？」
露店の弱くて小さな光りに捕らえられ、無防備になった表情を細虫に見られていた。
「……」
最初のうち、何も答えなかった紫羅であったが、
足を一歩前に出す度に、口に閉ざしていたはずの重りが少しずつ軽くなり、重りは消えてしまった。
「細虫。3年って長いもの？短いもの？」
細虫はなんの事について聞いているのか、すぐにわかった。
「……」
細虫は自分より小さな女ボスの後姿をしばらく見つめてから、自分が思っていることを口にした。
「長いですよ。人の記憶を忘れるぐらい簡単なほど」
「別に助針のこと、聞いているわけじゃないわよ」
素直じゃない紫羅は、そう答えていただろう。
しかし、聞いた口から声が出なかった。

それから、ふた筋の涙が流れ落ちる。
「頭…」
弱々しい外灯の下。
足を止めて細虫を見上げる紫羅の顔には、すべての気持ちと言葉が溢れ出していた。
「頭」
両腕を広げた細虫の胸へ、紫羅は吸い込まれるように歩み寄り、触れる寸前で大きく飛びのいた。
紫羅のいた空間に、一風と鋭い刃が振り下ろされたのは、その直後であった。
「丸虫」
「に、兄さん。な、何をしているんですか」
「目は覚めましたか、クップルング団の女頭」
小さな体に合ったものだが、殺傷能力のある剣を手にしたまま、丸虫は嘲笑うかのように紫羅にむけて言い放った。
「兄さん。頭にそんな言い方…」
紫羅は手を伸ばし、細虫の怒声を閉ざした。
「細虫。先に戻っていてちょうだい」
細虫の遠ざかって行く足音が消えるまで、海のある方向を見ていたが、表情と共に丸虫に向けた。
「ありがとう、丸虫。おかげで目が覚めたわ」
「言っておくけど、頭。俺が突拍子もない行動とったのには理由があるからな。
いくら『わきあいあい』とした盗賊団とはいえ、友達集団ではない。
頭というトップに立つ者が、そう簡単に涙を出すものではないから」
「なめられるから、でしょ。わかってる。公私混合はしない」
紫羅は厳しい表情になった。
かわいい容姿を持つ、少女が港町を仕切る盗賊のトップである以

上。いつ見下ろされても、おかしくはなかった。
裏切り者が出たいる以上紫羅は副ボスの弟であれ、弱りきった感情をさらけ出すわけには往かない。
『ましてや、細虫の場合は特に。頭は気づいていないようだが…』
紫羅は閉ざした口から息を吐き出し、親友の前にいる一人の女に戻った。
盗賊団のボス、副ボスの関係ではあるが、他に誰もいない時は親友同士に変わり、女ボスとしての威厳やルールも消滅する。
そこにいるのは、小さな青年と一人の少女でしかなかった。
「助針の奴。1度も手紙を出してこないのよ…もう、忘れちゃったのかな」
剣をしまった丸虫の表情にも険しさがなくなり、紫羅の言葉に苦笑してみせた。
「男というものは、そういうものだよ、紫羅」
丸虫も親友に戻った時だけ、少女を呼び捨てにした。
「そうかなぁ…助針の性格からして、こまめに出してくれると思ったのに…」
「助針さんの事だ。手紙は書いたが、送ろうにも、住所を知らなかったりとか、色々とあるんじゃないのかい」
「……」
紫羅は再び海のある方向を見上げた。
「会いに行ってみたらどうだ?」
「会いにって丸虫。助針は今、世界中を転々としてて、どこにいるのかわからないのよ」
「情報の町だ、紫羅。助針の実家に行けば、わかるだろう」
「でも、私は、ここのボスよ」
「町も、仲間も、今のところ問題はないし。燻ろうとする火種もない」
「……」
紫羅は前に進んだ。

1歩、2歩、3歩目で止まり、振りかえることなく丸虫に聞いた。
「甘えても言い？」
「ああ。行っておいで」

酒酔いたちも寝静まる闇の時間。船に乗りこむ人影があった。
紫羅は甲板を軽やかに進み、不寝番にもきづかけることなく後方に置かれている木箱の影に、とりあえず身を潜めることにした。
…したものの、木箱の前に置かれていた荷物が突然、動いた。
「わっ」
いくら軽やかで闇中が見える紫羅であっても、荷物が動くとは予想できず、見事にぶつかり声が出てしまった。
「おーい、どうしたから？」
運悪く不寝番が近くにおり、音のした方向に移動用ランプ、カンテラを向けたが
不寝番は背を向けた。
「女を連れこむのはいいけれども、外でやってくれよ。こっちはヤバイ荷物のおかげで神経がぴりぴりしているんだから」
「悪いわね～」
紫羅は荷物と思っていたものに抱きついたまま、片手を振って不寝番を去らせた。
「ふう。危ないところだったわね」
「あの～。いいかげ話してくれません？」
抱きつかれた者は、困惑しているものの紫羅の腕が離れることはなかった。
「やだ。絶対、放さないから」
「…その声、もしかして紫羅さん？」
「もしかしなくても、私しかいないでしょ」
船上を照らす明かりは、二人に届かないものの紫羅は3年ぶりの懐かしい顔を見上げたまま、反らすことはなかった。
「何してたのよ、助針。3年も。それに…港についても、顔を見せ

ることなく、ずーっとここにいるつもりだったの」
「いや。船はお昼頃に着いたのですが、今までずーっと眠っててて…」
「……」
「3年の事については…。一応、手紙を書いたんですが、肝心の住所を忘れちゃって…」
助針は床を指差した。
「ついでに転んで落としたのを、拾ってたんです」
「そしたら、私がぶつかってきたと言いたいわけね」
「はい」
紫羅は呆れ、抱きついていた腕を放した。
もちろん転がったままの手紙を拾うため。
「こういう時、闇の中が見られる紫羅さんって大変便利ですね」
「馬鹿…」
紫羅は何も見えないので立っているしかない助針の手に、拾った手紙を渡した。
「あれ？一つ足りない…紫羅さん。そこらへんに、まだ落ちてませんか？」
「え、まだあるの？ちょっと待って…」
紫羅は辺りをくまなく見渡したものの、それらしき紙は見当たらなかった。
「ないわ…」
振りかえった紫羅は、自分のすぐ後ろに助針が立っているのに気づいた。
「すいません。ポケットにありました」
「…。それって、計画？」
「はい…」
素直にうなづく助針に呆れようとしたが、表情をつくるよりも早く、紫羅は首の感触に気づいた。
「これ。受け取ってくれませんか」
その感触は、首の周りと胸の上のわずかな重み。

「…指輪」
「サイズがわからなかったので、鎖に通してもらいました」
「……」
闇中にもかかわらず、助針は紫羅の視線を感じとった。
「紫羅さん。残念ながら、私の修行はまだ続きます。自分自身でも、一人前になれたとは思えません。
それでも、まだ、待ってくれますか？」
「……」
その問いに言葉はいらなかった。
重なり合う唇で十分だったから。
「信じているから」
それから紫羅は苦笑して言った。
「アジトに戻ったら言われるわね」
「何て、言われるんですか？」
「魚が猫に鈴をつけたって」

妖精のいる森

あの愉快な盗賊団ができる前、俺たち『謎の３兄弟』は、遠く離れた大陸の深い森の中で暮らしていた。

いや、正確には暮らさなければならなかった。
気が付いた時には、この森にいて。その前は…わからない。
記憶がないというべきだろうな。半年前の出来事を誰一人として語れるもの者がいないのだから。
「……」
自分たちの素姓を握る鍵は、体調１０センチしかない自分の姿だろう。
その背中にはトンボのよう透けた羽根が４つ、蝶のようにくっついていた。
妖精、には間違いないだろう。
「妖精、か」
妖精の姿を持っているが、その髪は赤く。目も鋭い。
パステル色の妖精には程遠い姿だった。
それは２人の弟達も同じで、違うところといえば、その体格だろう。
２番目は羽根があるが、人間と変わらない身長を持ち。３番目となれば妖精の形式すらない熊のような体格だ。
俺達が妖精との混血児であるのは、記憶がなくても推測できた。
それ故に、妖精の世界から追放されたのも。
「……」
自分達の素性を握るもう一つの鍵は、目の前にある２つの大木。

銀色を思わせる幹と、エメラルド色の葉。
妖しげな木と木には、1メートルほどの間があった。
そこから別の世界に入れるのは、記憶がないはずなのに知っていた。
それから、そこに入れるのは人間と呼べない姿をする俺だけで、二度と戻ってこれないことも。
だが、弟たちを置いて行くわけには、いかない。

「…お、道が開けてきた」
警戒というものを知らなかった俺は、素直に彼らが現れるを見ていた。
今となっては自分の無防備さに悔やむべきか問題だが…。
「さすがは隷度(れいど)さん。目的地につくどころか、宝物さえ、ぶら下がっているんだから」
現れたのは5人の男。
どいつも、ギラついた鋭い目を持ち、人を不安にさせる嫌な気配を放っていた。
「だから、俺の言うことが正しいって言ってんだろ」
中央にいた男の肯定は、捕まえろという命令でもあった。
男たちは、めいめいに虫捕り網を取り出し、一斉に向かってきた。
多勢に無勢だが、こっちは1人で背の羽と空がある。1、2度かわして上昇すれば、それで終わり。
「こらー。汚ねぇぞ」
「降りてこーい」
「……」
このまま、上昇していけば、何ごともく、弟たちのところへ帰れるだろう。
「……」
だが、1人の男が気になった。
隷度と呼ばれている男。

その目は他の者と明らかに違っていた。
底光りする、闇の目。
俺と同じ匂いをした…。
だから、隷度に向かって笑みを向け、さらにそれを口することができたのだろうな。
「なあ、捕まる気はないが、俺を買わないか？」
「捕まえれば、タダだといのにか」
「俺は捕まらない。あんた達は手もちぶさで帰るだけだ。そこの未知なる入り口があるが、人間は入れない
ようになっている。
今なら『迷いの森』の案内もしてやるよ。ここの森はひねくれている。偶然ここまで来られても、偶然、帰れ
るとは限らないからな」
「お前の話が、信用できると思ってるのか」
男は呆れながらも笑った。大方、自分の闇と同じものを持っていると気付いたからだろう。
「弟たちを町で暮らさせたい。普通に生活できるためには、金が必要だ」
「……」
隷度の鋭い目は、内面まで見透かされているような気がした。
とはいえ、やましい事はしていないから、普通に見返した。
「ふん。まあ、いいだろう。こっちにとっても、リスクなしは、ありがたいからな」
「恩にきる」
俺が売られれば弟たちと離れ離れになってしまうが、そこの世界に行くよりはマシだと思った。
弟たちはしばらくして、後からついてきたが…。

「あの時、お前を買った事を後悔しているよ」
書斎の椅子にどっかりと座っている隷度は、浮遊する羽のある小さな青年、丸虫を睨んだ。
「盗賊団の副ボスになって、脅迫めいた取引なんざ押しつけられる事もなかったんだからな」
「出世なら、あんたの方が上じゃないのか？館の主人に変装して乗っ取っているんだから」
「…ふん」
隷度は手にしていた書類を机にほうり投げた。
「そういえば、記憶がないと言ってたな。戻ったのか？」
それから取引から遠ざかるためにも、思いついた事を口にした。
「いいや、自分の名前すら知らないし、思い出す気にはなれない」
「怖いのかい。真実を知るのが」
「違うよ。その過去に価値がないからだ。
悔やむ過去を思い出したくない、あんたと同じで」
丸虫は闇のように笑った。

はじまりの館

まだ港町にクップルングという盗賊団ができる前の話

サクリファイス館という『珍しい人種販売所』に売られることになった、体長１０センチしかない男は、与えられた虫かごの中で大人しくしていた。

自ら売られる道を歩んだ者にとって逃げ出す気などなく、明かりのない商品保管場所で、一眠りすることにした。

…はずだった。

「が～、出せ、出せ～」

森にいた、おしゃべり鳥よりやかましくては、眠れないどころか、耳を塞いでも精神的なに支障をきたす…。

「あたしが何したっていうのよ、ただ昼寝していただけじゃない。それなのに、勝手に捕まえて、こんな所に閉じ込めて、どういう事よ」

「ちょっと、お隣さん…静かにしてくれないか？これじゃ眠れやしない」

虫かごの右隣にある檻中の者に注意してみたが、謝罪が返ってくるわけはなかった。

それどころか、かごが大きく揺れた。暗闇で全く見えないが、伸びてきた手が虫かごを掴み取ったようだ。

「何これ…小さいし羽があって妖精じゃない」

「妖精みたいだけども、記憶喪失だから良くわからない。それにしても、あんた、こんな状態なのに見えるのか？」

「猫系の一族だからね。当然よ」

「…じゃあ、耳とか尻尾という、お約束の姿なのか？」
「オプションは、ないよ。てんとう虫君」
「て、てんとう虫って…」
「だって、髪と目と服も赤か黒なんだもん」
どうやら、色もわかるらしい。
丸虫は驚き、それから恐怖心を抱いた。
ペキペキベキと音を立て虫かごが大きく揺れたのだから。
「わっ。おい、何してるんだ」
「しっ。見張りに聞こえちゃうじゃないのよ。今、虫かごを壊してあげているんだから、静かにする。
ほら、鉄製じゃないから、ちゃんと壊れたわよ」
「ちゃんとって…」
「感謝したら、恩返し、よろしくね」
「は？」
「ドアの所に鍵束があるでしょ。それ取ってきてね」
「ドア？どこにあるんだ」
「私がナビしてあげるから。
まずは飛んでまっすぐ進む。ちょっと上昇して、右。行き過ぎ、戻り過ぎてどうするのよ。
ＯＫ、ＯＫ。そのまま。取った？じゃあ、戻ってきてね。ごくろ～さま～」
昼間と変わらず見える者にとって、受け取った鍵束から一つ一つ取り出して確かめるのに造作はなく、正解の鍵は五個目にあったから作業はあっという間に終了した。
「さて、さっさと脱走するわよ。あんたも来るでしょ」
「まぁ、いいか。もちろん行くよ」
「じゃあ、しばらくの間、よろしくね、てんとう虫君。私は紫羅(しら)っていうの」
にっこりと笑い差し出した手に、男の小さな手が触れた。
「これじゃあ、握手になんないわね」

男は苦笑したが、その苦笑は別なものだった。
「頼むから、てんとう虫だけはやめてくれ…」
男の名前が丸虫（まるむし）に決定し。紫羅との縁も、その場限りではなかった。
これが、クップルングの盗賊団の『始まり』であった。

「隠れれば、脱走がバレず速やかに移動できたものを……殴り倒そうと考えるか？ふつー」
走りながら愚痴をこぼす丸虫に、紫羅は反論する暇はなかった。
走る事に集中しないと（倒し損ねた者たち…）すぐに捕まってしまうから。
「紫羅、どっちを選ぶんだ？まっすぐか？右か？」
飛び慣れている丸虫は前方に現れた曲がり口を見ながらいった。
「…。ううん、前でも、右でもなく。左上を選ぶわ」
宣言するのと同時に紫羅はその方向に跳び上がった。
跳び上がり、目の前に存在していた縄梯子を登りはじめた。
「な、何だこれ？こんな細い糸で。切れるのがオチだぞ」
丸虫が忠告するものの、紫羅は細すぎる縄梯子を登り始め、糸が切れることも、落ちる事なく、梯子が取り付けられている柱まで登り終えた。
「大丈夫、女の勘は当たるの。今みたいにね」
「……。で、その勘は、次どうすればいいと思っているんだ？」
床から4、5メートルある通路のアーチ型の天井には光りを取り入れるための窓が取り付けられている。
「まさか…」
ニヤッと笑った紫羅は、笑ったせいで、突然伸びてきた腕に対処する術を失った。
「わっ」
と声をあげながら、腕のひっぱられるまま窓外へ
「しらっ」

落下の二文字を想像した丸虫は後を飛んで向かった。
よくよく考えてみれば、伸びてきた腕がある以上、その体が落下しない場所もある。
窓外は、わずかな幅しかないが、身軽な紫羅と浮遊できる丸虫と引っ張った者にとって、身の危険はそれほど感じない。
紫羅は割ろう（…）としていたが、一枚だけガラスがないのがあったようだ。
『おそらく、紫羅みたいな事をしたな』と、丸虫が推測したのは、腕の持ち主を見たからであろう。
「私が囮（おとり）になって館の従業員をひっかきまわしてあげるから、あなた達は向こうにある大木に飛び移って逃げればいいわ」
「へ？突然、引っ張って、助けてくれるってわけ？」
「信用できない？」
苦笑する者は、紫羅たちと同い年ぐらいだろう。
闇色の長い髪を束ねて活発的なかわいい系の紫羅とは違い、黒髪をなびかせる少女は美少女というところだろう。
「ただより高いものはないからね。現実的な世の中だもの、罠か無理難題があるか、ね」
「ご名答。助ける代わりに、条件が一つあるのよ」
黒髪の少女は懐から、手紙を取り出した。
「これを多人種ハンターの隷度（れいど）に届けてくれるのならば、脱走の手伝いをしてあげるわ」
「た、多人種ハンターだと」
多人種ハンターは、紫羅や丸虫を捕まえた張本人であった。
予想していなかった存在に声をあげたが、紫羅も同じ反応を示していた。
「もしかして、果たし状？それとも裁判沙汰の手紙」
むっとする美少女を見て、丸虫は確信することができた。
「恋文というやつだな」
黒髪少女の表情が変わり、紫羅もさらに変わった。

「恋文って、あの犯罪者に？」
「犯罪って…あれはビジネスよ。そりゃ、勝手に人をさらっているわよ…私もその一人だし」
うつむく美少女に赤味がさした。
「でも…好きになっちゃったんだから、仕方ないでしょ」
被害者でありながらも、得体の知れない男に惚れるとは…俺には正直考えられないことだった。
紫羅も同意見だが、彼女は理解することはできるようだ。
「まあ、恋愛にマニュアルなんてないんだから、いいんじゃない。いいわ、私が見つけてちゃんと届けてあげる」
「本当？」
「女に二言はないわ」
「ありがとう…」
黒髪少女は微笑むものの、すこしだけ泣きそうな顔をしていた。
今まで、ずーっと脱走する者たちを逃がす代わりに手紙を渡してくれるよう、頼んでいたと思う。
でも、自分たちを捕らえた加害者の恋愛に理解するどころか、奴に近づく気にを持つ者はまずいなかっただろう。
助け、断れ続けていたところで、突然、理解までしてくれた。
「……」
理解してくれる者がいる。不安になっていた者にとって、これ以上の安堵感はないだろう。
「ただし、恋愛の決着だけはごめんだからね。手紙は渡すけれども、告白は、自分でよ」
「…わかっているわ」
黒髪少女は笑った。

『恋愛の決着意外は、助力を惜しまない』という言葉が、いつの間にか定着し、俺達は何かあるたびに助け合うようになった。

姿も考えも違う奇妙な3人だけれども『絆』が生まれる瞬間であった。

その後。偶然にも、俺達は隷度に会うことができた。
とはいえ、逃げ腰で渡したので、受け取った手紙を読んでくれたのかまでは、俺達が知る術はなかった。

時が過ぎて
「……」
色あせ、ボロボロになった紙は、変わらぬ言葉を語っているのに。
愛しい文字が、胸をしめつける。
『切ない』という言葉が冷酷な人間にも、涙を作らせた。
「……」
隷度は酒をあおり手紙から逃れようとしたが、伸ばした手は再び手紙を捕らえる。
「何でだ…何故なんだ？深黒…。俺たちは、こんなに近くにいるのに、想いは変わらないのに…どうして遠いんだ？
お前に会いたい。本当の意味で会いたい…」
隷度のこぼした訴えは、広い書斎にわずかに響いて消えた。
しかし、誰一人耳にすることはなく、トップとは思えない、哀しみと不安を訴える表情も、目にした者はいなかった。
「ご主人様」
いないからこそ、室外にいる部下の声に冷静に対応することができたのであろう。

「また、ブラック、スノー（黒髪少女の別称）が、脱走しましたが、すぐに見つけました」
「わかった。いつものように、脱走ルートを見つけだし、厳重なる監視に切り替えろ」
「かしこまりました」
言葉とは裏腹に、隷度が安堵する顔も、知る者はいなかった。

脱走と出会い

サクリファイスという人種販売の館から脱走した二人の奇妙な少年少女は、森の中を走った。
奇妙というべきだろう。
少女の方は人と変わらない外見をしているが、明かり一つない真っ暗な森を難なく走っていた。障害物をよけて木の根につまづくことなく、まるで昼間のように。
「追っている気配はないが、暗視能力のあるお前さんの目で確認してくれ」
それが少女、紫羅の能力であった。
「…。大丈夫みたいね」
後ろを確認した紫羅(しら)は肩に視線を向けて、小さな相棒を見つめた。
自分の名前すら記憶していない男は体調１０センチしかない妖精だった。いや、妖精にしては鋭すぎる目をしているが。
背に羽根があることと髪が赤いことから、紫羅は『丸虫』と名付けたがセンスのないネーミングに反対する様子もなく受け入れたらしい。

「深黒（前話で脱走の手助けをした少女）の話だと西に向かえば港町に着くって言ってたわね」
走る足を止めたけれども、歩く足は止まらず2人は進み続ける。
「そうだけれども…どうするんだ？町に着いたところで」
「そうね。丸虫で見せ物にして稼ごうかしら」
「…」
丸虫は不服の目を向けたが、口にしなかったのは物音を耳にしたからであった。
「丸虫、何か向かってくる」

「追っ手か」
前方を見つめたまま紫羅は首を横に振った。
「それにしては、小さすぎる。身売り館に住む追っ手のエキスパート種族なら別だけど」
ありえないようで、ありえる話であった。
２人が収容されていた館は、珍しい外見や能力を持つ種族専門だから。
「でも、大丈夫かな…ある意味、大丈夫じゃないみたい」
「見えない人間にわかるように、説明してくれ」
「今、こっちに向かってくるのは、あたしたちより小さな子供なんだけれども…彼女、後ろにいる男達、５、６人かな、追われているのよ」
「…。それって、俺達と同じ、館脱走か？」
「さあ、可能性はあるわね。とにかく、助けるわよ」
丸虫の『どうやって…』という問いに答える暇なく、紫羅は走り出した。
闇中が見えない丸虫にも、たいまつの明かりが近づき、それが追っ手だということまでわかったが、紫羅の襟に捕まっているのが精一杯だった。
いくら背中に羽根があるとはいえ、見えない闇の中に放されれば迷子になるのは目に見えている。
幼子を捕まえるための怒号と、息を切らしながら走る幼子の音。それと上下左右、に動く紫羅で丸虫にとって何が何だかわからないまま、時が流れた。

なので、丸虫が気がついた頃には、騒動は影も形もなかった。
「ここまで来れば、もう、安心」
「…うん」
未だに闇の中でわからないことだらけだが、逃走仲間が一人増え

たのは確かなようだ。

「逃げてきたんだな。この子の手を引いて、一緒に」
「そう。暗視能力を利用してね。明かりに頼らなければならない連中だから楽勝、楽勝」
「巻き込まれる方は、たまったもんじゃないぞ…で…」
丸虫は紫羅の隣にいる少女に視線を向けた。…と、言っても誰も明かりを持っていない、暗い森の中。丸虫には小さな子供の輪郭すら見えず、そこに人の気配がするのが頼りだった。
「バンゼと申します。あの…本当に、安心してもいい方々なんですか…助けていただいたのに…すみません」
『少し混乱しているが、気品を感じる口調…どこかの金持ちか貴族階級の子供じゃなかろうな…』と、丸虫は一抹の不安を覚えたが紫羅は…
「なぁに…いいってことよ。あたしらも館から脱走してきたんだから」
気付く様子はなく、仲間ができた事に喜んでいた。
「私たちは、逃走仲間なんだから。握手して、森をぬけ出すわよ。ほら、丸虫」
紫羅は丸虫を羽根をさわらないように器用に持ち上げ、両手を差し出すように頼んだバルゼの上にちょこんと乗せた。
「おい…握手とは呼べないだろう」
「丸虫の手じゃ小さすぎて無理じゃない」
「え…丸虫さんって、こんな小さな人なんですか？」
手の重みで者の存在をしったバルゼは顔を近づけた。
「背中に羽がある妖精んだよ」
「え、本当なんですか。うわぁ…すごい、本物の妖精さんなんだ」
「感激しているところ悪いが、君が想像するかわいい姿はしていない。今、見えない方が幸せだと思うほどな」

「いいえ。そんな事はありません。丸虫さん、紫羅さんの声は恐い人の声じゃないのは確かです。だから、きっと、お姿も言い人の姿をしています」
『君に断言されてもなぁ…』と苦笑するしかない丸虫であった。

暗い森の中だが、追っ手を恐れ3人は森の中を進んだ。
いや、正確には2人であった。闇中が見える紫羅がバルゼの手を引いて進み、丸虫はバルゼの肩にちょこんと乗っている。
「街を歩いていたら、いきなり捕まって馬車に乗せられたの。隙をついて逃げ出したら…」
「私たちがいたっていうことね」
「うん」
疲れた様子も見せず、歩き続けるバルゼに楽をしている自分が申し訳なく感じる丸虫であった。
「問題はなぜ、捕まったか、ということだな。バルゼは俺達みたいな奇妙な姿はしていないんだろう」
「うん…。きっと、誘拐してお金をだまし取ろるんじゃないかな」

会話が一段落したところで、3人の進行も止まることにした。
追っ手の気配はないが、どんな生物が潜んでいるかわからない森の中。紫羅が見つけだした大木の上で休むことにした。
「ちょっと登ったところに休めるくぼみがあるのよ」
「木の上って…バルゼは大丈夫なのか？」
「大丈夫です。木登りは大好きです。登りすぎて、ばあやに怒られています」
「…。だけど、今はそんなに寒くないが、朝方は冷えるし、風邪…って、おい、聞いているのか」
「平気だって。ほら、丸虫。そんな苦虫噛みつぶした顔していない

で」
「丸虫さん、肩に乗りますか？」
不安を消せない丸虫は、念のため辺りを見回したが不安は目に映らず、しぶしぶ自力で上がっていった。

「だから、俺は反対したんだ」
小声で丸虫が反論したが、もう遅かった。
下からの物音に気付いた時にはもう明かりが近づいてくるところだった。
近づいてきた者たちは馬車と馬を使っての移動で、下手に動けばすぐに気づかれてしまう。相手の動きを待つしかなかった。
まだ、相手がさっきの追っ手と決まったわけでもなく。向こうは木の上の存在に気付いてもいない。
もし近づいてくるのが旅商人の集団、キャラバンならば便乗させてもらおうかと考えていたが…。
現実は、そう甘くないようだ。
「いいか。交代で徹底的に捜せ。相手は子供だ、そんな遠くにはいない」
バルゼを誘拐した一行は、よりによって3人のいる大木で休息をとり始めた。
『だから、俺は反対したんだ』という顔を紫羅に向けたが相棒はけろりとしていた。
『気付かれていないんだから大丈夫よ』という表情を浮かべた。
下でたき火をしてくれているから、わずかに読みとることができたが、嬉しくはない3人であった。

「何かぬけだせる方法はないかしら」
凍えながら紫羅が口にできたのは、追っ手2人を残して探しに出

かけたからであった。
その2人も1人は休み、1人は火の番をしているが船を漕いでいる。
「朝まで待った方がいいんじゃないのか？このまま気付かれなければいいんだから」
丸虫は僅かな明かりでバルゼを見てから首を振った。
疲労と子供寝る時間をすぎたらしく、とても夜通し歩くのは不可能なのは明らかである。
「でも、私が捕まって馬車が走っていた時間は一時間もありません。西にまっすぐ向かえばトンバラズの港町に着きます」
首を振って歩こうとするけなげなバルゼに、紫羅は考え、決断した。
「私、港町までひとっ走りしてくる」
「は？」
「バルゼは誘拐されたんだから役人か、保護者を連れてくるのよ」

「……」
紫羅はバルゼから預かったペンダントを握りしめて大木から降りていった。
足の裏に猫の肉球でもあるのか、音一つたてずに。
「……」
残された丸虫は大いに不安だった。
まず、紫羅が無事に捕まらずモンスター類に遭遇することなくたどりつけるのか。
着いたとしても役人などの味方となる者達を連れてこられるのか
バルゼは身代金目的の誘拐だが、バルゼの家はどのぐらいの地位があるかにも関係していた。貴族階
級以上ならば役人だってくるが。それに、善人地位じゃなければ…
下手したら紫羅が『怪しい奴』として捕まる恐れだってある。

「……」
それらがうまくいったとしても、戻ってくる前に下の連中に気付かれればアウトとなる。
「……」
不安をあげればキリがなく、ため息をつく丸虫はバルゼの視線に気付いた。
「大丈夫ですよ。丸虫さん。きっと、うまくいってくれますよ」
根拠のない言葉だが、今はうなづくしかなかった。
「寒くはないかい？お腹は？」
「平気です」
バルゼに不安というものが見当たらず、丸虫はそれを口にした。
「丸虫さんがいるから、怖くないです」
「下の連中みたいに鋭い目をしているのにかい？」
「丸虫さんは良い人の目をしています。安心できる人です」
もう少し会話を続けたかったが、下にいる追手がおもむろに立ち上がったので、息を潜めることにした。
それは交代するための動作で、緊張を緩められない時間が続いた。

『紫羅の奴。洞窟を見つけてくれれば、バルゼを休ませることができたのに』
先のことを考えていなかった相棒に、文句を頭の中で言ったが現状は変わることはない。
それから数時間たったが紫羅が戻ってくる様子はなく、バルゼは限界まで達していた。

「バルゼ…寝相はいい方か？」
必死に起きていようとするバルゼはうなづいた。
「木に落ちなければ、休んだ方がいい。何かあったら起こすから」
バルゼはうなづき、そのまま眠りにはいった。

しかし…たぶん家でやっているんだろう。人形を抱きしめて寝る習性が…。
「おい…」
座ったまま眠りにつこうとするバルゼにとって人形以外に見えなかったらしく。簡単に捕まった丸虫は、なすすべもなくバルゼの胸元に引き寄せられていった。
「…」
捕らえられたもののの、力はさほどなく、脱出は可能だが、丸虫は動こうとはしなかった。
『小さな娘が、事件に巻き込まれ心細いんだから、精神安定剤になるならば』
という気持ちからであったが、遠く離ればなれにいる弟たちの存在を思い出したからでもあった。
館に連れられたのは丸虫だけであり、もし安定した生活が送れるようであれば呼び出そうとしていたが、今は置き去りにしている。
『弟たちとバルゼをすり替えて自己満足しているだけにすぎないが…あいつら、元気にやっているんだろうか』
闇の空を見上げていた事に気付き、丸虫は慌てて下に警戒した。

時がどのくらい流れたのかはわからなかった。
下の交代が3回ほど行われていたが、状況は何一つ変わらない。
「…」
バルゼから抜けだした丸虫は、空を見上げた。
闇は水で薄めたように淡く、夜が明けようとしている。
「紫羅は…現れないのか」
丸虫はバルゼから抜けだして閉じていた羽を開いた。そのまま飛びだそうとした時、何かが揺らいだ。
「バッ…」
座ったまま、熟睡していたはずのバルゼの上体が、そのまま木の上に倒れ、危うく落ちるところだった。

本人にとっては寝返りをうつ感覚での動きだったんだろう。目を覚まして体勢を整え、何とか落下を避けることができた。
しかし、ここが危険と隣り合わせにしている木の上であり、丸虫がわずかにあげた声も加わって、安眠は抹消されてしまった。
「あぁっ。上だ、木の上にいる」
「しまった…バルゼ上に登れ、早く」
バルゼは、落下以上に危険な状態であることに理解するまで時間がかかった。しかし、混乱することはなく、丸虫の指示に従ってくれた。
「館に売られる時、武器の没収を防ぐためしまっておいたものだが、さすがにこの体長じゃあ、気付く者はいなかったな」
そう言って、丸虫は懐から3センチにも満たない短剣を取り出した。
「ただ、これが役にたつか…」
下にいる男たちは3人だが、こちらは妖精のみ。
「地の利を最大限に使うしかない」
急降下した丸虫は小さな刃を、登り始めた男の眉間?に切りつけた。
「うわあぁっ」
薄らぎ始めたがまだ闇の力は大きく、誰も丸虫の存在に気付く者はいなかった。
突然現れた小さな驚異に気付けなかった男は、意図も簡単に落ちていく。
「な、何かいる」
地面に激突しめいいっぱい声をあげてから、男は警告を告げようとした。しかし、痛みが走り血が流れている事に気付きさらに悲鳴をあげた。
何が起こったのか、わからない男に対し、丸虫は今のように血管を狙って次にきりかかろうとした。はずだった。
目の前が真っ暗になった。それが人間の手だとわかった時にはも

う、丸虫は今までいた大木の幹に叩きつけられた。
「っ…」
羽が多少のクッションとなったお陰で、丸虫はすぐに幹から離れた。
どしんと音がして、蹴りつけた足が幹に着いたのはその直後である。
「怖がることはねえ、ただの虫一匹、切り落とせ」
丸虫の存在に気付いた一人が声をあげ、残り二人も長剣をぬいた。
触れれば致命傷につながる刃を上昇することで切り抜けて、最初にいたところで振り返った。
誰か登ろうとするものなら、切りつけようと決めていたが、向こうもそれを恐れてか、罵声をあげ脅す程度でいた。
「丸虫さん、大丈夫ですか？」
「大丈夫だが…長期戦になりそうだ」
捜しにいった仲間を呼び戻す命令が耳に入ってきた。
すぐに襲いかかってくる恐れはないが、時間の問題である。
「バルゼ、紫羅が戻ってくるまでの辛抱だ」
登ってくる気配はなく、戻ってきた丸虫の言葉に不安な顔でうなづいたバルゼは、細くなったがまだ座れる枝に腰をおろした。
「寒くはないかい？腹は？」
首を横に振って『大丈夫』と言ったものの、ほとんど聞こえなかった。
「バルゼ。俺がいる。絶対に守ってみせる」
「……うん」
丸虫の鋭いが、強い目にバルゼは、うなづいた。それから、つのる不安を抑えたい一心から人形のように抱きしめた。
丸虫も不平の声をあげることなく収まった？。
「…音がする」

バルゼから離れた丸虫は、敵に気付かれないように大木を放れ、どどどどと響いてくる音の正体を捜した。

「あれは…馬、馬車…敵か…いや、違う」

丸虫が敵以外の団体に確認がとれたころには、かなり近づいていた。

「バルゼっ。あれは、お前が知っている団体か？」

戻り声を荒げたものの、近づいてくる馬車や馬の音にかきけされ、自分の耳すら聞き取ることはできなかった。

バルゼも騒音に気付き、木の下から覗いてもわかるようになった。

「バルゼ。味方ならば、飛んで知らせてくる。このままでは気付かれる事なく通りすぎてしまう」

「……」

身振り手振りで伝えようとする丸虫をみて、バルゼは大きくうなづいた。

そして意を決して枝から飛び降りた…。

丸虫の声は届いていなかったようだ…。

「バっ、落ちる」

すでに落下しているバルゼを助けようと手を両手でつかみもち上げようと力をこめたが、そこは体長１０センチの妖精。共に落下の道を歩むこととなった。

「落ちた先が馬車の荷台だったから良かったものの…。こっちは生きた心地しなかった」

走り去っていく馬車と一行を見つめながら、丸虫は言葉を漏らした。

「まあ、二人とも怪我しなかったんだから。良かったじゃない」

バルゼを救ってくれたので、是非保護者に会ってほしいと言われたが、それを断った。とはいえ、お礼はもらったが。
「本当に良かったの？一般市民はめったに入れないお城なのに」
バルゼの正体。それは一国の王女しかも王位継承者でもあった。
バルゼが将来女王になると聞いて、王国の未来に不安を持ったが、驚くだけにした。
『王女かもしれないけれども、丸虫さんたちとは、友達でいたいな』
正体をあらわにしても、バルゼの言葉遣いは変わらなかった。もし、また会うことが出来たならば、そうなれたのかもしれない。
とはいえ、その確立はあまりにも低すぎるが。
「城に興味はあるが、見せ物になるから嫌なんだよなぁ。
そういう紫羅こそ。別に、お前さんだけ行ってきても良かったのに」
丸虫の言葉に紫羅はにこっと笑った。
「忙しいからね。これから野望に立ち向かうから」
「野望？」
紫羅は足を止めてにやっと笑い直した。
「私、決めたの。
港町で盗賊になる」
予想もつかなかった発言に丸虫も移動する事をやめた。こちらは、フリーズして動かなくなったからだが。
「なんでまた…盗賊に？」
「決たというより、勧められてられてね。バルゼ…王女の護衛する騎士隊長に。その能力は盗賊に適任しているって」
「…まあ、そうかもしれないが」
「それに港町にいた盗賊集団にものすごい派閥争いが起きて、しかも共倒れになって、壊滅状態でちょうどお買い得品な物件なのよ」
「不動産屋に勧められて、家を購入するのとわけが違うんだからな。
しかし、国が盗賊を勧めるとはな。何を考えているんだか」
「裏事情も聞いたよ。

いくら国側が法律とか作っても、裏でのらりくらりとかわされてしまうからね。町の秩序を整えるには、裏側からの力が必要なんだってさ。

ましてや港町だから、他国から船を通して密輸品とかがどんどん闇の物流が流れてくる。盗賊が壊滅した今の港町は無法状態で、闇の物流は膨れ上がり、それに連なって治安は悪くなる一方。このままでは首都にまで感染してしまう。

王国側としては、表向きは認められないが、任せられる者を置いておきたいってね」

「ふうん。で、お前さんは、そんなややこしくなっていく話に乗ったわけか」

「頼まれ金も、もらったことだし」

「…。それが狙いか？」

「違うわよ。おもしろそうだからよ」

紫羅の言葉に丸虫は再びフリーズした。

「おいおいおい。『おもしろい』だけで、人生を賭けるつもりか。言っておくが、盗賊なんて、そんな簡単なものじゃないんだからな」

「あら、簡単な人生なんてないわよ。世の中『難しい人生』ならば、面白い方がいいじゃない」

「……」

紫羅の言葉に、丸虫は苦笑するしかなかった。

「というわけで、丸虫。長く、大変かもしれないけれども、頑張ろうね」

巻き込まれている事に苦笑する気力はなかった。

丸虫はため息をつき、前方を見つめた。

町は、間近に近づいていた。

港町トンバラズ

港町の盗賊になると決心した紫羅（しら）と頼もしき小さな相棒（まるむし）丸虫は目的地にたどり着いた。

「……」

そして『決心』したことに少し後悔した。

「これが…港町か？」

大陸から様々な物があつまってくる港町。

商人が行きかい、様々な人が集まり、賑わいのある所。

なのにトンバラズの町は、それがなかった。

「港町ってこんなんだっけ？」

紫羅は隣で背中の羽で移動する体長１０センチしかない妖精こと丸虫を見上げた。

「森を出た時に入った別の港町は、ここより小さな所だったが、ここよりも賑やかだったな」

２人は街中を探索してみるものの、行き交う人、様々な商品を売る露天にも沈んだ空気を放っていた。

「灰色って言葉が当てはまるな」

「２つの盗賊が縄張り争いをして壊滅状態になったんでしょ。それが原因なんじゃない？」

「盗賊は裏の存在だ。表通りまで静まり返るのはおかしい」

「モンスターだよ、脱走者さん方」

声は前方の曲がり角から聞こえた。

建物と建物の狭い裏路地。薄暗い所から現れたのは３０代ぐらいの男だった。

「噂じゃ、派閥争いして負けた盗賊のボスが飼っていたモンスターが逃げ出したらしいよ」

それから男は手を差し出した。
「５０００リロ（お金の単位）で、詳しい話と多人種ハンターから捕まらないためのボディガードをしてやろう。その変わった姿は一発で多人種販売館からの脱走者以外ないからな。
それから観光案内もサービスするよ」
「断る」
紫羅の持つ布袋のふくらみに視線が向かっていることに気づいた丸虫は速答で答え。
「ＯＫ」
…たものの、紫羅は快く承諾した。
「紫羅、こんな無茶苦茶あやしい奴を信じる気か？」
「あら大丈夫よ」
「お前の勘がいつも当てはまるとは限らないんだからな」
「あら、勘だって良くわかったわね」
「勘以外で物事を判断したことがあるのか」
「……」
紫羅の無言に丸虫は頭をかかえた。
「安心しなよ、お２人さん。そう堂々と怪しいと言われて騙し取る気はなくなった…。
というのもあるが、騙し取る気がないのが本当のところだ。
俺もこの港町に住んでいるからな。なんとも言えない奇妙な空気のせいで気力がないんだ」

「ここに２、３日いれば嫌でもわかるよ。何て言うかな、休み開けの朝。酒を浴びた後にくる二日酔いのようにかったるくなる」
酒場の外から見える町を見ながら男は酒を飲み干した。
「モンスターは毛むくじゃらの固まりだが、人肉を好む。敵対する盗賊や物乞いやかっぱらいする奴らをさらっては餌にしていたらしい」

「派閥争いで壊滅して、飼い主がいなくなったからモンスターが逃げ出したってことか」
「それも魔族レベルだ」
見上げた丸虫の視線に男は満足げに言葉を続けた。
「妖精さんでも、魔族ぐらいはわかるよな」
「ああ。（自分の記憶はないが）知っている。遙か遠い物語だな。人間世界を支配しようとした『悪者大魔王』がいたが『良い英雄』がどこからともなくやってきて倒した。
魔王はいなくなったが、まだ部下は生きている」
「そしてよなよな起きては、悪い子を食う。それが嫌ならば良い子供になりなさいと親から言い聞かされたもんだな」
男はおとぎ話になりつつある歴史話に笑ったが、自分の過去を知らない丸虫は表情一つ変えず、男が口を開くのを待った。
「しみったれた話は、さておき。要はやっかいなレベルのモンスターだってことだ。
退治しようという声があるが、なかなか素早くて手も足もでない。だが一番の問題は、夜目が利くことだ。黒い嫌われ虫みたいに突然現れる。悲鳴に気づいた時にはもういない。モンスターも被害者もな」
「やっかいだな」
丸虫は目の前にある人間サイズの大きなコップにつがれた果実酒をスプーンですくい口に含んでから。相棒を振りかえった。
厄介ごとに首をつっこみたがる少女ならば『じゃあ、それを倒せば一大有名人。そのまんま盗賊段のボスになるチャンスね』と言ってもおかしくはなかった。
「……」
しかし、隣の相棒は静かだった。
「すぴ～」
旅の疲れか酒のせいかはわからないが、椅子に座ったままの状態で熟睡していたから。

「やれやれ、しょうがないお嬢さんだ。
丸虫とか言ったな、宿はとっているか」
「いや。だが、安全なところを選ぶし。お前さんの助力は要らない」
「信用できないのはわかるが、どうやってお嬢ちゃんを宿に連れて行くんだ？それに、この布袋も」
「紫羅を叩き起こせば済むことだ」
丸虫は手を振って男を追い払った。
「気を緩めないのは、港町じゃあ当然のことだが、後悔するからな」
男は立ち上がり、テーブルの上にいる小さいが隙のない男を見下ろした。
「そうかい。その助言だけ受け取っておく。俺はあんたを信用するより、俺は後悔する方を選ぶよ」
見下ろされているのにもかかわらず、丸虫が向ける目は男の目と変わらないものだった。

しかし後日。この会話を知らない女ボスが『黒粘土』と命名し快く仲間にいれ、遠い後日。男の言葉を思い出すこととなった。（猫と船と闇　参照）

「で、人がせっかく、気持ち良く寝ているところ邪魔したわけね」
紫羅は鋭い目を丸虫に向けたが、丸虫が言葉を返すことはなかった。
紫羅を叩き起こし、荷物を背負わせて宿屋に向かわせたったのだが、当の本人は紫羅の肩で船を漕ぎ、危うく部屋の床に落とすところだった。
「ちょっと丸虫。自分のことは棚にあげる気」
紫羅は胴体を軽くつかみ振ってみたが、起きる気配はなかった。
おもいっきり振りたいが、小さすぎる体では骨が折れる可能性が

あり、仕方なくほったらかすことにした。
「ほったらかすと言っても…どこに置こう」
自他ともに認める紫羅の寝相では枕元にすら置けない…。
「いっそのこと、照る照る坊主にして窓に吊るすか。晴れれば一石二鳥だし」
もちろん冗談だが、紫羅は窓を開け、夜の空気を取り入れた。
窓外は夜闇が覆い、時の流れと共に光の恩恵を受けなくなった冷たい風が紫羅の頬を通り、髪をなびく。
「ん？」
更なる一風が少女に警告を与えた。
声を立てる間もなく、紫羅は窓から飛び込んできた黒い塊に動きを封じられた。
「うわっ、な、何？」
窓側の近くにいた紫羅は反対側の壁に背中をぶつけていた。
痛みが伝わってくるが、痛みよりも何が起きたのかわからす混乱が痛みを消していく。
「……」
「…何だ？紫羅？おい、どうした？」
目を覚ました丸虫が辺りを見まわしたが、僅かに闇を消していた蜜蝋の炎ですらかき消されてしまっている。
暗色の空間で、相棒が今の情報を知る術がなかった。
言葉という情報伝達があるのだが飛び掛って来た、見えない『それ』は口を塞ぎ、紫羅が抵抗する手足が壁にぶつかる音しか聞こえない。
「おい、紫羅。明かりをつけろ。一体、何がどうなったんだ？」
丸虫の声は、異変に気づいたがそれが何なのかわかない不安が含まれていた。
「……」
そんな闇の中で暗視の力を持つ紫羅の目は、自由を奪うう『脅威』を見続けていた。

それは黒い髪をした人型、少年であった。しかし、その肌は…
「？まさか、見えるのか」
動きを封じていた者も持つ暗視の目が紫羅の表情に気づいた。
「……」
その者は捕らえたばかりの獲物から手を離し。
そして、背を向けて走り出した。
「ちょっと、待ちなさいよ」
「おい、何があったんだ」
「何でもない。丸虫、荷物頼んだわよ」
紫羅は『それ』の後を追い、開けはなれた窓から飛び出した。
「おい、紫羅。ここは2階だ」
丸虫の遅い警告を無視し難なく着地した紫羅は改めて待機命令を出すと、恐れもなく夜の町を走り出して行った。

「はぁ…まったく、すばしっこいんだから」
夜の港町の裏路地に入りこみ、明かり一つない暗色の通路を走り続けた。
町の活性をおさえるモンスターのせいか、はたまた紫羅の運がいいだけかわからないが、行く手をさえぎる者たちが現れることなく、追いかけっこは続く。
それが唐突に終わったのは目の前の曲がり角を無警戒に進んだ後であった。
「わっ、ととと」
紫羅は暗色の狭い通路を走ろうとしたが、目の前に追いかけていたはずの物体が物のように転がっていたため、危うく転ぶところだった。
「ちょっと、何してるのよ、危うく転ぶところだったでしょ」
「……」
座りこんでいた者は　倒れていた。

「え、ちょっと何よ、あんた…どーしたっていうの。まさか、動けないところを油断させて襲いかけようとするわけ？」
「ぐるるるる～」
声の変わりに音が答えた。
お腹がすいて動けないと…。

コウモリを飼う人種ではない。だが、暖かいみ物。それが自分の生命をつなげる食事。
それは、生命を維持するために流れ出る生きた液体…それが口の中に入っていく。
この体に…

「入っていくだと？」
意識を取り戻した少年の目は暗色に包まれた狭い路地と、ひざまくらをして少年を見下ろす少女、紫羅に気づいた。
それから少女から放たれる赤い液体。
「な、何をした」
少年は跳ね起きたが紫羅が動ずることはなかった。
「良く言うわね、勝手に倒れておきながら」
「好きで倒れていたんじゃない。それはそうとなぜ、口に入れた？」
「口に入れたって血の事？そりゃあ、あんたがうなされるように『ち…血』と言ってたからよ。吸血鬼さん」
「俺は吸血鬼なんかじゃない」
「どうして？棺の中にいる死体みたいにあんたの肌、真っ白を通り越して灰色じゃない。その前にあんたって生きているの？」
紫羅の言葉に少年の目が険しくなった。
「お前…見えるのか？」
「暗視能力があるからね。死人のように白くで最初はびっくりしたけれどね」

「恐く…ないのか？」
「あんたの肌は恐いけれども、あんたの顔、恐くないわよ。怒っても威厳なさそうだし。あ、優しそうだって事よ」
「……。本当に恐くないのか」
紫羅は速答で同じ言葉を唱えた。
「…変だな。お前…」
少年は息を吐き出し、気を緩めた体が限界を告げた。

「今だから、話すよ。あの宿の部屋は、食事用に使われていたものだ」
紫羅の膝に頭を乗せるのに抵抗はあるが、抵抗する体力のない少年は暴露した。
「宿屋の主人と斡旋する男、あいつらと商談を結んだ。商談だ、契約ではない」
「あたしにしたら、同じになんだけれど」
「全然違う。あいつらは商談以上の約束はできない」
「？」
「話を戻す。あいつらは餌となる者たちを斡旋し、俺は部屋に泊まった者を襲う。俺にとっては食事の提供する代わりに、俺は街中を騒がしているモンスターに宿屋と関係者、それから男を襲われないようにする」
「モンンターって、あれ、あんたの仕業なの？」
「それは違う。
言っておくが、モンスター騒動は俺ではない。別にいる。
俺の持つ能力であのモンスターの動きを抑えることができる。それだけだ」
少年は言葉を閉ざした。紫羅が短刀で切り、流れ出た血を口にするため。
「本当に…いいのか？もらっても」

「襲いかかってきたのに？」
「襲うのと貰うのでは大きく違う。それにわざわざ血を提供する奴なんていない」
「あたしは別にいいわよ。あんただって、とりあえず生きているんだし。生きるのに困った人をほっておくわけにはいかないからね」
「……」
それは食事のために口を開いたが、紫羅の言葉が頭の中で浮かんだまま消えないでいた。
『生きるのに…か』
少年は推測した。
この者は（宿屋にいた）連れも別種族の者なんだろう。だから町の者と違い抵抗感がないんだ。
「……」
だが、この姿を見られる者など始めて見た。この姿に恐れないのも。
さて、どうしよう。
この姿を見た者に生命を持たせる権利はない。（商談した奴らとは見えないところで連絡をとりあっている）
「…。あんたに礼がしたい。明日、北側にある3番倉庫に来てくれないか？」

昼間とて光の触れない闇の中。倉庫。
少年は積まれた物のように存在していた。
物も者も空気もすべて闇の中に覆われうずくもっていた。
「……」

遙か昔の物語。
闇でしか存在しないように人間は我々一族を追いやった。
忘れ去られた、いや、封印された一族の生き残り。

故に姿を見られるわけにはいかない。この死人のような肌をした人型の生物は『それらの生き残り』でしかいないのだから。
あの少女は気付いていないだろうが、口を開けばたちまち騒動になる。
面倒なことにならないうちに町を出た方がいいだろう。
『碑獣(ひじゅう)よ。人に飼い慣らされた、落ちぶれた動物』
少年が唱えるように放った声が消えると、すぐに物音がした。
「ここにくる少女を消せ」
『御意。……様?』
町中を騒がす一匹のモンスターが人語を大きく放ったのは、闇中にいる少年の体がぐらりと揺らいだから。
「まだ回復していないようだな。
…。
碑獣よ。予定を変更する」
「はい」
「あの少女は私が始末する。お前は私のエネルギーとなれ」
「エネルギー…でございますか」
「ああ。お前ら碑獣は、元々2つ先に生まれた兄者の食料としてつくられた生物。2つ後に生まれた弟がくらっても何の支障はないだろう」
「はい…。あなた方の命令を拒否することが、どうしてできましょう」
弱々しく答えた人喰いモンスターは、ゆっくりと進んだ。自ら喰われるために。
何も見えない闇の中。当事者しかわからない小さな異変は少年に襲いかかった。
力の差があるとはいえ少年の体調と油断が回避できなかった。
「…。な、何を」
「命は惜しいものです」
声は少年の耳元で響いた。

「貴様。何をしているのかわかっているのか」
「ええ。あなた様の肩に喰らいつき、エネルギーを我が物にするのです」
「人に飼われ、家畜以下に陥ったモンスターめ。許される事とわかっているのか」
叱咤しながらも少年は抵抗を続けた。
しかし、もがけばもがくほど碑獣の肉を裂く牙体内くい込んでいく。
「昔話になるほど昔なら私は、一瞬にして朽ち果てていく事でしょう。
でも、ここは何もかも忘れ去られた現代です。あなた様を喰らったとしても何の『おとがめ』はありません。
いや、むしろ。弱くなった肉をたしにして、闇の存在を繋いでいくものでは、ないでしょうか」
モンスターが僅かに止めた間に少年のうめき声があがった。
少年は闇の中で転がり肩を押さえようとしたが、その部分がないことに気付いた。
「…」
肩の痛みよりも、誇り高いプライドに、動く力を失った。
立ち直るまで数秒であったにしろ、致命傷を負うには十分な時間であった。
少年は声を放った。
生きているからこそ放つことができる。『悔い』の叫びを。
その声が少年自身の耳に届いた。
「…」
だから気付くのに時がかかったのだろう。
耳に届いた声に自分以外の声があったことに。
「……」
それから一風に気付いた。

時が流れて
「私にとって、それは『生命の風』と呼んでいます」
闇の中にいる少年こと『影』は回想を終えて、仕えるようになった女ボスに言った。
とはいえ、それを耳にする者はいない。
この部屋にいる盗賊の頭こと紫羅は、椅子に座り船をこいで夢の海原を冒険していたから。
「頭は私を恐れない。というより、私の正体、名前すら聞こうとしない。
だからこそ、私も頭に忠誠を誓うことができる」
影は昔、誰かが言ったある言葉を思いだし、今でもそれに納得できることを確認した。
『過去を忘れても生きていける』と

怪盗事件

「怪盗？」
『黒粘土』と呼ばれている、カードゲーム参加者の中で年長にあたる中年男は、手持ちのトランプをにらみつつ、言葉を放った。
「そう。最近、金持ちばかり狙った盗難が多いのよ」
向かい合わせに座る少女。港町の盗賊団のボスである紫羅は、ため息混じりに答えたが、手持ちのカードを見てにやっと笑った。
「でもさあ、その泥棒。絵とか、宝石とか売りとばしたらかなりの額になる高級品には目もくれず、現金か中流階級でも買えるアクセサリーしか盗んでいかない」
「足がつくからだろう。大きな組織なら海を渡って見知らぬ国で売ればいいが近所に住むコソ泥ならそうもいかない」
向かい合わせに座る黒粘土と、盗賊団の女ボス紫羅から離れたテーブルに陣取っている１０センチの妖精みたいな丸虫は、いらなくなったカードを捨てに飛んできた。
その小さな体でトランプを持つと、周りから見られてしまうからの処置である。
「コソ泥とはいえ、盗まれたのはプライドの高い連中だ。連中が『コソ泥』ではなく『怪盗』と呼んで騒いでいるからな」
「件数がやたらと多くとられた額を計算すれば、かなり盗られているらしいですね」
一風が黒粘土の頬に当たった。それから、テーブルの中央に集められている捨てカードが増えているのに気付いた。姿を見せない仲間、影である。
「で、その怪盗を俺らの仕業じゃないかと疑っているわけだ」
黒粘土はカードを取り、まだあどけなさが残る少女の顔を伺った。もちろん、手持ちカード状態を見るため。

「ううん。ここの偉い人から『いかがわしい怪盗』を退治するよう依頼が出たわ。疑われてはいないわね」
紫羅は立ち上がった。
「我が盗賊団クップルルングは最下級層の秩序を保ちつつ、ちょっと悪どいことをしているだけだからね。町を混乱しないように活動しているから、存在を認められているし何かあれば要請がくる」
紫羅は丸虫のいるテーブルに近づき伏せてあるカードを一枚とっていった。
「いわば町の掃除屋だからな。
それはそうと頭。いい加減ポーカー覚えてくれないか。盗賊団幹部がババ抜きなんて絵にならない」
「やだ」
事件が始まろうとしているものの、ここの空気は平和のようだ。

「銀貨が10枚。銅貨が23枚。アクセサリーなし…まったく、金持ちのくせして、ろくなのがないわねぇ」
移動用ランプ、カンテラを照らしながら赤髪の女は不平を漏らした。
闇の中にある唯一の明かりは壁を照らし、有名そうな絵画に向いたがすぐに闇と化した。
「……」
「ちょーっと、相棒。ちゃんと捜してる？物音しないわよ」
ソファー寝そべる相棒は手にしていた書類らしきものを床に落として、サボっている事を隠した。
「…ふぅ」
『相棒』と呼ばれる同じ赤髪の男は、頭の中で愚痴をつぶやくのであった。
『酒場で声をかけたばかりに…意気投合して、ウワバミ女の酒代ま

で払い、財布はすっからかん。
真夜中に警備の薄い高いところから侵入して盗みを働いても、相棒の酒代で足が出てしまう。
とほほ、だよ。
まったく、これじゃいつまでたっても…』
「……」
赤髪の男は愚痴をこぼしていた事に後悔した。
闇の中で何かに触れたのだ。
「メア、逃げろっ。人が居る」
赤髪の男に触れたは鋭利な刃物であった。
コインが床に鳴り響いた。
相棒の行動を耳にしながら、男も頬に触れている刃物を無視して起きあがり、窓に向かった。
「お待ち、コソ泥2人組。窓から飛び降りたって…」
暗視能力のある紫羅は、二人が窓から飛び降りるのを目にした。
ここは3階。下は広い庭になっているものの木はない。
紫羅は窓に向かい、外を見つめた。
下ではなく、闇の空を。
「…やられたわね。コソ泥があたしらみたいに特殊能力持っていたなんて」
「サクリファイス館（特殊能力者たちの人種販売所）の脱走者でしょうか」
闇の中にたたずむ影も、赤髪の女が鳥の姿に変わっていったのを目の当たりにした。
「かもね。明日、深黒（サクリファイスに住む親友）にでも、情報を聞き出すしかないか」
「それはどうでしょうか」
盗賊段の女頭は影の言葉に振りかえった。
「うまくいけば、今夜中にも決着がつくかもしれませんよ」

空を飛んで2人は大木の太い枝にたどり着いた。
「もお、最悪。鳥の姿じゃ、銀貨2枚しか運べないのよ」
女泥棒ことメアは、くちばしに銀貨をくわえたまま人の姿に戻り、柔らかい唇から今回の報酬を手にした。
「その状況でも盗む根性がすごいよ。
しかし、どうするんだ？俺達目をつけられているぞ。下手すれば昼間だってウロつけなくなる」
人の姿で飛ぶ能力を持つ男は頭をかき、背中を見つめた。飛ぶ力をもつ『それ』がちゃんとしまえたか確認するため。
「鳥の姿になってればいいもん」
「お前はいいよ。俺は変身できないし。第一、鳥の姿で酒場に行けるとでもおもっているのか？」
「う…しまった」
相棒より酒場を重視する女に男はため息をついた。
「まったく、どうしようもない弟だな」
新たなる声に、2人は凍りついた。
「だ、誰？どこ？」
「ここにいるよ、メア」
男は自分の肩に向けていた手を相棒の前に差し出した。
「手の上に」
明かりのない木の枝だが、暗闇になれた目を凝らせば男の手の平に何か居ることぐらいはわかる。
「な、何？動物？物？私の目じゃ、わからないわよ」
「10センチの妖精だよ。しかも、俺が旅する目的にもなった。生き別れの兄貴だ」
「…　…　…」
相棒男の言葉を理解するのに数秒とかかった。
「あ、兄貴って、お兄さん…になるんだよね。この世界に妖精がいるのは知っているけれども。
…ちょっと待って。あんたは人間サイズじゃない」

突然の再会による衝動もあるが、メア混乱はそっちにあった。
「俺が虫の羽で飛んでいるところを見たことがあるだろ」
ちなみに相棒はメアよりも長身である…。
「あああるけれど…これが生き別れのお兄さん…ええぇっ」
相棒男は頭を抱え、酒場の件よりも混乱するメアをほおっておくことにした。
目の前にいる兄を睨みつけるために。
「何しているんだ。末弟を置いて」
「……」
丸虫の言葉に弟は、目をさらに吊り上げた。
「それは兄さんだって同じことだろ。どうして俺達を置き去りにしたんだよ。3人で力を合わせれば、森だってどこだって暮らせるのに。どうしてなんだよ」
丸虫は、特殊能力者を専門に扱う人身販売に身を売って、2人の弟から姿を消した。
2番目の弟は兄を探すため、この町に来た。
「無理だ。人間の姿に近いお前たちならともかく、この小さすぎる姿では一目を引く。俺は売り物になって金になった方がお前達のためだ」
2番目の弟は兄のいる手を握りしめた。
「何、勝手なことを言っているんだよ。それは自分の都合に合わせただけじゃねぇか。何が小さすぎる姿だよ。人間と違う姿して生きていかなければならないのは俺も弟も同じなんだよ。
俺達は、記憶を消され、故郷を追い出されたこの状態で一生すごさなければならない。力を合わせなければ、誰かが1人でも欠ければ生きていけない、そういう立場なんだよ」
「……」
握り締める弟の力は強く丸虫は苦しかったが、弟に向ける目は刃物のように鋭い。
「…。お前の言うことは少しだけ正しい。

だが、間違ってもいる。
確かに俺達は生まれた記憶を消され追い出された。死ぬまでこの姿だ。だが、身を潜め合って生きていかなければならない弱者ではない。
俺達がこれからたどる行動によって立場は変わって行く。
誰かが欠けたって生きていかなければならない」
「やだ。兄さんと一緒じゃきゃ嫌だ」
「嫌だって、何、子供みたいな事を言っている。俺は一介の盗賊になったんだ。お前らは別の道を歩め」
「俺だって立派なコソ泥になったんだ」
「胸を張って言えることじゃないだろ。第一、あいつはどうするんだよ」
「手紙で呼び出せばいい。あいつは俺の言う事を守って、まだ村にいる。俺らが戻ってくることを信じて真面目に働いているよ」
細虫の一言で子供じみた喧嘩は収まって行った。
「真面目にか…」
「あいつは真面目だから、何年たっても何十年たっても、俺らが戻ってくる事を信じつづけている。
兄さん。それでも兄さんはまだ勝手なことを言うつもり」
「……」
丸虫は言葉を詰まらせ、弟が放った言葉にうなづくしかなかった。
「兄さん。俺らは1人でも欠けてはならないんだ。この世界でたった3人だけの家族なんだから」

怪盗事件は幕を閉じた。
盗賊団に依頼した者達に報告し、盗難事件がぱったりとやんだからである。

「本当に本当に、あの船で来るのね」
コソ泥2人組、細虫とメアは特殊能力を買われ盗賊団の一員となり、今日、丸虫たちの弟が新たに加わる。
水平線かなたに浮かぶ小さな点が近づいてくる様を、出迎えに来た兄弟以外の者たちは興奮しながら議論をかわしていた。
「だって丸虫が普通妖精で、2番目の弟君が人間サイズの羽根付き。となれば…」
「いや、頭。いっそのこと、丸虫サイズに戻っているじゃあないかな。それでいて羽なしとか」
丸虫と2番目の弟こと細虫は視線を交わし、意地の悪い笑みを向けて近づく船に視線をもどした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8610v/

クップルングの盗賊

2011年8月27日18時17分発行